

# FD REPORT 2021

## FACULTY DEVELOPMENT MUSASHINO UNIVERSITY



有明キャンパス5号館

Contents	02	学長挨拶
	03	第1回全学FDSD研修会
	06	第2回全学FDSD研修会
	10	第3回全学FDSD研修会
	12	第1回目的別FD研修会
	13	第2回目的別FD研修会
	14	FDSD検討小委員会の活動・令和4年度FDSD活動計画について
	15	授業改善小委員会の活動
	18	授業評価アンケートを踏まえた学科FDの推進について
	22	学科FD実施報告
	26	研究科FD実施報告



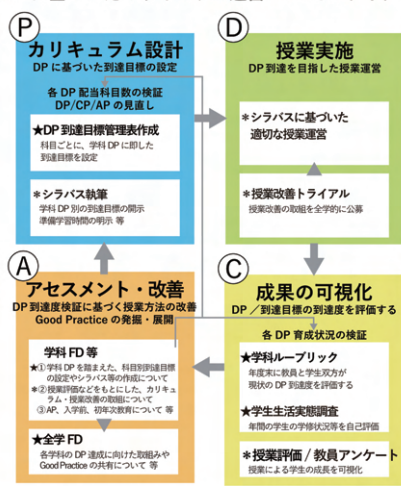
# 総合大学としての 教育研究活動を支えるFDの充実

武蔵野大学学長 西本 照真

本学は平成 31（令和元）年度に大学基準協会による第3期認証評価（大学評価）を受審し、同協会が定める大学基準に適合していると認定されました。この第3期認証評価では、内部質保証制度がより一層重視され、大学の質保証システムが実質的に機能しているか、教学マネジメント体制が構築され適切に運用されているかを問われました。令和3年度の自己点検はその評価と指摘を基に全学レベル／カリキュラムレベル／科目レベルでの内部質保証体制の確認を行い、内部質保証におけるFDの重要性について改めて認識することができました。

右の図は、自己点検の中で改めて確認し図式化した、本学の教育の質向上のためのPDCAサイクル図です。学科、研究科ごとにディプロマ・ポリシー（DP）を定め、それに紐づいてカリキュラム・ポリシー（CP）・アドミッション・ポリシー（AP）を策定してカリキュ

<武蔵野大学 教育の質的向上サイクル>  
DPに基づいたカリキュラム運営のPDCAサイクル



ラム設計を行い、授業の成果は学科ルーブリックや授業評価アンケート等で検証しています。この成果検証に基づき、各学科が次年度に向けた改善のためのFDを実施することで、PDCAのサイクルが完成します。逆に言えば、プランを立て、チェックするところまでで終わってはいは、改善は見込めません。学科で、また全学で、課題を共有し解決策を議論することで初めて次のプランに繋がるのです。このように、FD活動は重要な役割を担っています。

認証評価においては、これらカリキュラムレベルの質保証の取り組みについて、一定の評価をいただくことができました。しかし一方で、大学院や通信教育部において同等の活動ができていない点が課題として指摘され、令和2年度からは大学院（研究科）FDの取り組みも始めました。

新型コロナウイルスの感染が収束しない中で始まった令和3年度は、5月に「オンライン授業の効果的な実施方法について」と題した全学FDSD研修会を開催し、教育効果の高いオンライン授業を展開する教員が、グッドプラクティスを共有しました。また、新設した情報副専攻（AI活用エキスパートコース）の取り

組み内容を共有し、副専攻の意義や目的について理解を深める機会としました。今後も積極的なFD活動を全学的に推進し、さらなる教育の質向上を目指していきたいと考えています。

本学は、大正 13（1924）年、世界的な仏教学者で文化勲章受章者でもある高楠順次郎博士によって、仏教精神に基づいた浄土真宗本願寺派の宗門関係学校として、現在の中央区築地に設立されました。昭和 25（1950）年に武蔵野女子短期大学を、15 年後には武蔵野女子大学を設立し発展の礎を築きました。さらに平成 15（2003）年に現大学名へ名称変更し、翌年の全学部男女共学化及び薬学部設置を契機に、大学改革を推進してきました。平成 24（2012）年にはこれまでの武蔵野キャンパスに加えて臨海副都心に有明新キャンパスを開設し、令和3（2021）年4月現在 12 学部 20 学科 13 大学院研究科、通信教育部2学部3研究科、1専攻科と2別科、24 研究所・センターを擁する規模に至りました。この矢継ぎ早の改革に、学外から少なからず注目を浴びているのも事実です。

近年の教育改革の歩みでは、平成 27（2015）年に学修の質向上とギャップイヤー活用のために4学期制の一部導入、同時に3つのポリシーの見直し、教育課程体系化のためのカリキュラムマップ導入を推進しました。

同年、文部科学省の大学教育再生加速プログラム（AP）テーマⅣ採択を受け、フィールド・スタディーズ（長期学外学修）の推進を本格的に開始しました。翌平成 28（2016）年には、手掛けてきた改革の検証機能を高めるべく、教育の質的評価のための全学授業評価アンケート（毎学期）、本学オリジナルの全学学生生活実態調査もスタートさせ、一昨年は全学及び学科・研究科ごとにアセスメント・ポリシーも制定しました。

このようにPDCAサイクルの基盤構築を図り、エビデンスに基づく検証体制を整備する取り組みを進めています。

令和4年度は、本学のオリジナルな教育手法を開発し教育支援をさらに充実させていくことを目的として「武蔵野大学響学開発センター」を開設します。このセンターがイニシアティブを発揮して、本学の独自の学修スタイル「響学スパイラル」（問う→考動する→カタチにする→見つめ直すという一連の活動を、他者と互いに学び合いながら繰り返していく学修活動）を学生一人一人に定着させ、主体的な学びを醸成していくためのFD、SDに積極的に取り組んでまいります。

加えて、2024 年の創立 100 周年に向けて中期計画を実行中です。全学の力を結集して大学改革を大きく前進させる中で 100 周年を迎えたいと思います。引き続きのご理解と、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



## オンライン授業の効果的な実施方法について

人間科学科 五島 直樹 教授

私は2年程前に国立研究開発法人産業技術総合研究所から本学に赴任してきた。1年目は対面授業に慣れることや学生の気質をつかむことに精一杯で、2年目は1年目の経験をもとにより良い授業ができると思っていたが、新型コロナウイルスの影響でオンライン授業になってしまうという試行錯誤の連続だった。昨年度の後期の授業は、前期の経験を生かして少しずつオンライン授業のノウハウを蓄積していくことができたため、私なりに習得した方法を紹介したい。

4学期に人間科学科の1年生216名に対して行った『人間科学基礎』の授業を事例として説明する。人間科学科では、Google Classroomによって教職員が学生全員とコミュニケーションを取ることができる状況になっており、MUSCATと併用して授業の開催に関するアナウンスを行っている。また、Google Classroomの課題提出機能を利用し、授業で使用する学習資料の事前配布や、授業後の課題提出が可能となっている。

授業は対面授業とオンライン授業を並行して行い、同時にオンデマンド授業用に録画もしているが、そのための環境構築について具体例を紹介したい。オンライン授業ではZoomを使用し、録画した動画をオンデマンド授業に利用している。オンライン授業を受ける学生の中には、自宅等で通信環境が悪く、Zoomのフリーズや接続が落ちてしまうケースが多々あるため、録画した授業を希望者に限定してオンデマンド配信することは重要な対応であると考えている。

教員側で必要な基本ツールは、ノートパソコン（以下PC）、セカンドモニター（以下モニター）、書画カメラの3点である。メインのPCから画面出力を分岐し、モニターに画面共有を行う。PCでZoomによるオンライン授業を行い、モニターの画面を教室のスクリーンとオンライン授業の学生の画面に映す。PCの画面共有は行わず、Zoomの参加者リストや予備資料等、学生には示せない情報を見るために使用している。

次に、書画カメラの活用方法を紹介したい。学生からの質問への解説や、学生の反応を見て追加で説明したいことがあった場合、通常は黒板を使った板書によって説明することが多いが、オンライン授業を併用する場合には黒板での板書は困難ことが多い。そんな場合に書画カメラが便利で、Zoomの画面共有をすることで、紙に手書きした映像を教室のプロジェクター（対面授業）とオンライン授業の学生にも示すことができる。

続いて、対面授業に焦点を当ててみたい。対面授業を実

施しても、東京都の新型コロナウイルス感染者数が増加すると、オンライン授業を希望する学生が必ず出てくる。東京都の感染者数とオンライン授業を希望する学生の割合には相関関係があったと考えられ、令和2年12月に東京都の新規感染者数が2,000名を超えたときには、対面授業の参加者は216名中たったの2名であった。なお対面授業を行う場合には、学生が安心して授業を受けられるように、教室に設置してある二酸化炭素モニターを使用し、換気が十分にできていると示すことが非常に有効である。

また、Zoomで録画した動画をオンデマンド授業へ利用する場合、録画した動画は、不要な部分を削除し必要な部分のみに編集することが可能だ。私は『VideoProc』などのソフトを使って動画の編集を行い、編集後にYouTubeを使用して配信を行った。YouTubeでは長時間の動画を多人数かつ同時アクセスで何回でも視聴でき、一定期間、閲覧者を限定して配信することもできる。私が作成した『人間科学基礎』のチャンネルのコンテンツでは、学生に限定的にURLを配信して動画を閲覧してもらっている。一度アップしたコンテンツは自由に公開期間の設定をすることも可能だ。

その他、便利なツールを2つ紹介したい。一つ目は、Bluetoothでワイヤレス接続可能な片ヘッドホンマイクだ。対面とオンラインの学生の音声を両方聞くことができ、教室内を自由に動き回って授業を行うことが可能になる。二つ目はスピーカーマイク付きウェブカメラで、これを接続しておくと、カメラの方向を変えるだけで、教員と対面授業の学生の映像と音声、オンライン学生の音声を全員で共有することが可能になる。

最後に、授業の内容に関して述べたい。学生に授業に集中してもらおう方法の一つとして、事前配布の学習資料の課題を空欄にしておき、授業中のどこかでこの課題を示し、学生に手書きで写させるという方法があり、これは非常に有効な手段であった。また、授業の冒頭や終わりに、ニュースで話題になっている項目をピックアップして解説するようにした。例えば、新型コロナウイルスの場合にはウイルス、PCR検査、抗原検査、抗体検査、免疫、生体防御、創薬、ワクチン、感染予防などを話題にした。また、ノーベル賞の時期になると、ゲノム編集、遺伝子、倫理的問題などの話題を取り上げた。タイムリーな話題を示すと、学生たちの反応は非常に良いことが分かった。

ここに示したことがベストなことではなく、これまでの私の経験から、少しでも効果的な授業ではないかと試行錯誤した結果である。





## オンラインを活用したスパイラル型授業

教育学科 小野 健太郎 准教授

今日は、令和2年度の前期に行った科目『初等算数科指導法』を事例として話を進めていきたい。この科目は、小学校算数科の指導計画と指導方法の実践的なスキルの獲得を目的とした学科必修科目で、主に3年次生が履修しており、毎回4～5人のグループで一人が授業者役、残りの履修者が児童役を務めるシミュレーション型の模擬授業を行っている。

この科目は学生のアクティブな学修が必要であることから、授業評価アンケートにおける学生の満足度は決して低くはなかったが、いくつかの課題が学生から指摘されてきた。課題は大きく分けて次の2点である。一つ目は「リアルとシミュレーションの乖離」、二つ目は「グループワークによる負担感の不均衡」である。

昨年度前期はオンライン授業を余儀なくされ、この科目を開講するにあたって、次の3点を意識して実施しようと考えていた。①環境要因のストレスの低減、②コンテンツの関連付け、③課題の個別化とグループ化である。

①については、安定したネットワーク環境でテレワークを行うこと、ハードウェアを安定させることが大前提である。後者については、雑音を軽減するために集音性のあるマイクを使うこと、板書はホワイトボードに記入しカメラで映して共有することによって劇的に改善することができた。

②に関しては、乖離を防ぐため実際の現場で授業見学することや実習の実施は困難であった。従来、本学科で実施されている教育インターンシップや有志による教育研究会への参加を促していたが、全員が参加できたわけではない。

そこで、新たにコンテンツを作るのではなく、既存のコンテンツを関連付けてつなげていくことで、学修者にとってリアルをより実感できるように工夫できないかと考えた。具体的には、まずわれわれが目指すべきゴールイメージを共有するために、オープンアクセスが可能な小・中学校の授業動画が閲覧できるサイトを学生に紹介し、授業の序盤段階で、小学校6年生の算数の授業を全員で視聴した。オープンアクセスかつオンデマンド配信のため、学生の希望によっては授業後にも個別に見直すことが可能だ。

次に、この動画の授業者である先生のテキストを教材として指定し、この科目や3年次生対象の他科目と関連させながら活用していった。教材の事例をもとに学生にアドバイスをを行うことで、最初に見た授業動画と、テキストに書いてある理念の関連付けがなされていく。

さらに、著者の加固先生にご講演いただいた。従来の対面

型であれば、現役の教員にご講演いただくことは時間的・空間的に困難であったが、オンライン講演により可能となった。

このように、授業動画、テキスト、さらにご本人の講演というコンテンツの関連付けを行っていくことで、単に授業を見学する、テキストを読む、外部講師の声を聞くという、単体のコンテンツの組み合わせとは違う学修効果が得られたのではないかと。

最後に、③について、従来はグループワークの形態をとっていたが、グループ内でどうしても「負担感の不均衡」が生まれてしまうため、最初に学生一人ひとりと私で学習指導計画と授業のイメージを計画するという、課題を個別化することに移行した。

具体的には、Zoomの画面共有機能を活用し、学生が作成した学習指導計画について私がコメントを載せ、学修支援システムなどを利用して評価をフィードバックすることを通じて指導計画をブラッシュアップしていった。そして、各自が課題を個別的にブラッシュアップさせたいうえでグループ化し、グループ内で一人ひとりが指導計画を持ち寄って模擬授業を行う。対面では実施できなかったが、オンライン上で一人が授業者役、残りの学生が児童役になるという少人数でのグループ模擬授業を実施した。これにより全員が一度は必ず責任のある立場で順番に授業者を務め、学習指導計画のデモンストレーションを行うことができた。

今後への活かし方としては、本年度も引き続き学修の個別化とグループの模擬授業を通じたオンラインでのグループ化課題を行っていく。そして、授業の最後には、一昨年度まで行うことができていた学級サイズでの模擬授業を再開したい。これを、「スパイラル型のオンライン活用授業」と考えた。まず、スパイラルの基盤として同じ授業を全員で視聴し、ゴールイメージを共有する。視聴した授業者のテキストを全員が同じ拠り所として共有することで、同じ算数教育の理念を共有しながら学習指導計画をより洗練されたものにしていく。そのうえで、「個別のミーティングで質を上げる→グループでの模擬授業を行うことで振り返る→学級サイズでの模擬授業を行う」ことで、同じ授業計画でも、より良くするチャンスを3回得られるスパイラル（何度も循環するような形での課題の更新）というものを計画した。

来年度に向けての課題は、①対面型のメリットをより活用していくこと、②フォーマルなコンテンツのオンデマンド配信、③履修年度を越えた交流と共有の3点が挙げられる。可能であれば履修年度を越えて、先ほどのスパイラルを1周終えた学生が後輩の学修活動を見ることで、今度はメンターとしてアドバイスできる場を確保することができるのではないかと考えている。





## 数理・データサイエンス教育の推進 (副専攻の導入) について

MUSICセンター長 上林 憲行

本日は、令和3年度から正式にスタートした「情報副専攻 AI 活用エキスパートコース」の概要を紹介する。

最初に、コース開設の背景から説明したい。キャッチフレーズは、『AI for ALL』を掲げている。現在、世の中は不確実性の時代であり、これから消えていく職業や、新しく生まれる職業を含めて、激動の時代であると言われている。また、2045年にはコンピュータの能力が、人間の知性を超える可能性があるという予測もされている。この二つの大きな流れの中で、これから新しく生まれる職業でも活躍できる人材や、コンピュータが提供する知的な能力を十分に活用できる人材が求められている。

令和元年4月には、政府の人材育成戦略における総合科学技術・イノベーション会議答申で、AI 人材育成戦略の概要が示された。重点的に取り組むべき施策として、①全ての大学生・高専生に初級レベルの AI 教育を施す、②AI と専門分野のダブルメジャー化を促進、③学び直しの支援のため、大学に社会人専門コースを設置することが掲げられている。①については、すでに令和2年度から全学の必修科目でスタートしているが、②に対応する施策が、今年度からスタートしている AI 活用エキスパートコースにあたる。ただし、経緯としては、政府の人材育成戦略を受けてから準備したわけではなく、それ以前から、「データサイエンス、AI 情報系のサブメジャーコースを準備してほしい」という、西本学長からのご指示を受けて検討を進めてきたということは、改めて申し上げたい。

本学では、各学科の特徴のある専門教育によって身に付ける「主専攻」の力と、AI やデータサイエンスのスキル、ツールの知識を身に付ける「副専攻」の力が、相乗的に備わった学生を育てていこうという方針をとっている。専門学部であるデータサイエンス学部を除いた全学部で、副専攻の履修が可能な形で準備をしている。特に、今年度から開設されたアントレプレナーシップ学部においては、副専攻コースを必ず履修する形でカリキュラムが組まれている。副専攻コースの学修内容としては、データサイエンスや機械学習に関するリテラシー、さまざまな情報の利活用のための情報技法、プログラミングリテラシー、これらをメディアやサービスの中にも実現するスキルを身に付ける科目などを配置している。学修内容が新しく、先導的な内容であることのほかに、学修スタイルとして『響学スパイラル』という新しい考え方に基づき、先行事例としてデータサイエンス学部で実践してきたグループ協同学修、参加型学修、アウトプット指向、学修コミュニティといった方法論を組み入れ、副専攻を運営していきたいと考えている。

次に、コースの教育目標と教育方法、訴求ポイントを紹介した

い。コース全体として、「情報・データサイエンス・AI の知識・スキル・ツールの一体的な習得を通じて、データ駆動型思考の実践知を学ぶ」が教育目標である。教育方法としては、全学の新しい理念的な指針となっている『響学スパイラル』の先導的な試行を進めたいと考えている。

コース全体の共通施策としての訴求ポイントは、世の中の第一級ツール（DataRobot、TensorFlow、Tableau、Python など）の使用体験と活用知識の習得、コンピテンシー（論理的思考やデザイン思考、協働的思考など）に関わるトレーニングにもなる授業スタイルの提供、高度なスキルを身に付ける際、学生それぞれの関心やステージに応じた適応型学修に配慮した良質な外部コンテンツの積極的活用などである。また、各科目での自己完結を超えた「実践学修コミュニティ」をコース全体で用意し、いつでも教員やチューターから学べる環境を提供したいと考えている。

続いて、コースの学修目標と運営体制について説明したい。まず、AI の「活用力」に焦点を当て、IT エンジニアの養成を目指すものではないということだ。さらに、AI の品質を決めるのは、そこに入力される学習データ、または分析データそのものであるといわれている。そのため、データの品質を担保できる一連のスキルは非常に重要なものであり、データの設計、操作、収集などをしっかり学んでほしいと考えている。そのためにも、世の中の第一線で使われているビジネスインテリジェンスツールを、在学中から実践的に活用することで、実務的なスキルを繰り返し学べる機会を提供したい。

また、これらのアウトプットを実際に使う局面、つまり人間が使うためのアプリケーションへの橋渡しのための入門的なスキルについても重要視したいと考えている。

よく「データサイエンス=統計学」と解釈されるが、それは誤りである。このコースでは、活用ということも含め、統計的な概念を理解したうえで、ツールで実際に目的の処理ができ、結果を導き出すというスキルにフォーカスして学べる工夫をしている。インタラクション密度の高い演習スタイルも重視し、全面的に展開したい。

この副専攻コースは、まだ BYOD 施策を導入していない大学が多い中、本学はすでに先行導入していることから、他大学を先導していると考えている。また、情報科目について、従来の“操作”教育から“利活用”教育にアップデートしていること、AI とデータサイエンスの基礎科目を必修化していることから、先行性を証明できているのではないだろうか。



## 学生の状態を可視化する『GPS-Academic』受検結果報告と今後の活用に向けて

株式会社ベネッセ・キャリア 高橋 広平 氏

本日は、令和3年度の1年生に受検していただいたアセスメントテスト『GPS-Academic』の受検結果と、今後の活用方法について紹介したい。

まず、大学で外部アセスメントが必要な理由について少し触れたい。『教学マネジメント指針』（文部科学省中央教育審議会大学分科会、2020）に基づく、現在、大学では「予測困難な社会でも主体的に生きていくことのできる自律的な学修者の育成」が求められている。そのためには、現在の学内のリソースが適切に配分され、狙ったとおりの学生の学修の成果が出ているのかということを検証し、検証結果をもとに指導改善やカリキュラム改定等の不断の改善をしていくことが非常に重要になる。こういった中で、外部アセスメントは学修成果、教育成果の把握、可視化の手段の一つとして用いられている。

この指標の中では、学生の学修成果の可視化に関しては、学生が自らの学修成果を自覚し、エビデンスと併せて説明できるようにするとともに、DP（ディプロマ・ポリシー）の見直しを含む教育改革にもつなげていくため、複数の情報を組み合わせて多元的に学修成果、教育成果を把握し、可視化することとされている。これらを還元すると、これまで主とされてきた成績評価に加えて、さまざまな側面から学生の状態を可視化することが求められてきているということになる。

この多元的な学修成果の可視化の手段についてまとめたものが、以下の図である。現在多くの大学がこの枠組みを採用して整理をしている。このモデルでは、その評価が学生の状態を直接的／客観的に評価できるものか、それとも間接的／主観的に評価ができるものなのか、また、それは

質的な評価なのか、量的な評価なのか、この2軸を用いて整理をしている。これにより4象限による可視化方法ができ上がり、その中においてアセスメントテストは、学生の状態を直接的かつ量的に評価するものとして、左下の赤枠の象限に位置している。

一方で、大学の育成方針と全く異なるテストをしても学修成果の測定にはならないため、各大学で卒業時まで学生に身に付けさせたい能力を示す DP に合った内容のテストを実施することが非常に重要になる。今回受検していただいた『GPS-Academic』は、まさに貴学の DP 内にある「創造的に思考・表現をする力」の習得状況の把握や、そのために必要な要素を考えるための参考データとして、今年度から1年生を対象に初めて実施をした。

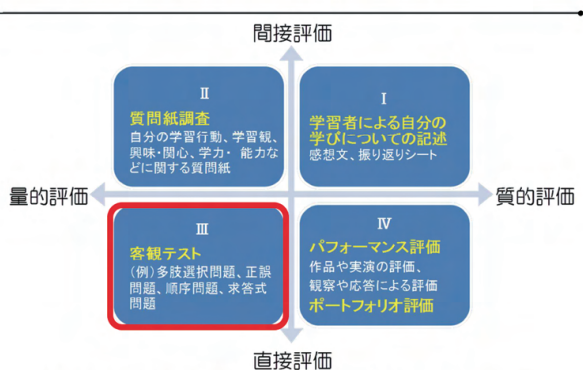
受検結果の前に、アセスメントテストの概要に関して説明したい。『GPS-Academic』は、答えが一つではない問いに対して問題を解決する力を、能力の視点から「思考力」、姿勢や主体性の観点から「姿勢・態度」、この能力や姿勢を習得するに至った過去の「経験」、この3つの観点から、学生の状態を可視化するテストになっている。また、4つ目の測定項目として、教学改善の参考となるような、学生の大学での学びへの興味、関心、不安などの意識を測る「学生意識調査」というアンケートも実施している。受検方法は、各学生が PC かタブレットで受検をする CBT 形式である。受検後即時に、学生にはオンラインの解説動画を視聴してもらい、振り返りもできるようになっている。

学生にお渡しする個人結果レポートの表面では、「思考力」、「姿勢・態度」、「経験」についての結果の概要をまとめている。「思考力総合スコア」は絶対スコア型で示しており、問題解決能力における現在の自分の強みと弱みの把握に加え、伸長を実感できる設計となっている。裏面には姿勢態度・経験の結果の詳細が示されており、より細かく自分の状態を確認し、今後の行動目標を立てていく参考資料として使うことができる。

ここからは、受検結果について報告をしたい。受検期間は令和3年4月5日～5月14日、受検者数は2,237名で、今年の新入生全体のうち約90%が受検した。

まず、「思考力」は入試偏差値帯40～50と、50～60の平均値の間に位置している。「姿勢・態度」は全国平均並みとなり、「経験」は入試偏差値50～60の間、また60

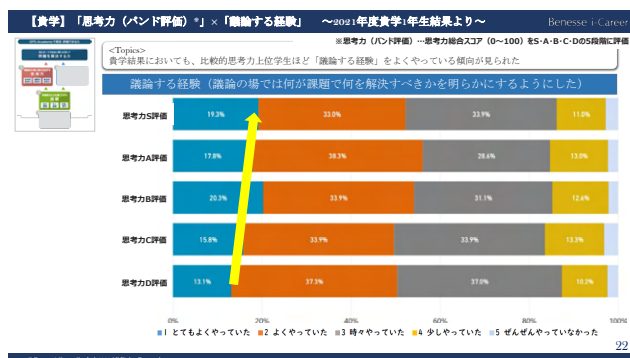
### (1) 直接・間接 × (2) 量的・質的



\* 京都大学 松下佳代 「学修成果の評価の枠組み」(国際シンポジウム2018)より



以上の層の平均値の間に総合値が位置している。貴学学生の特徴的な結果としては、「経験」の中の、問題解決のために他者と関わった経験値を示す「対人関係の経験」に関して、入試偏差値 60 以上の学生たちと同じ程度の経験を積むことができているということだ。



別の観点として、全国結果との比較ではなく、貴学の受検結果内でクロス分析することで見えてきた学生の特徴について報告したい。横軸に学生の能力を示す「思考力」を、縦軸に主体性を示す「姿勢・態度」を取り、凡例として入試区分ごとに学生の受検結果の平均をバブルチャートにしてみると、「思考力」が最も高い入試区分は共通テスト利用入試、「姿勢・態度」については総合型選抜が最も高いことがわかった。

また、希望進路別にみると、「思考力」の平均値が最も高いのは、専門資格職、教員・保育士を除く専門資格職（医師や歯科医師、薬剤師、看護師、弁護士、公認会計士、税理士、社会福祉士など）を希望している学生で、「姿勢・態度」については起業をしたいと考えている学生群が最も高かった。

改めて、先ほどの受検結果を踏まえると、貴学の DP 達成に向けて、今後は「思考力」をさらに育成していく必要があると考えられる。そのためにはどのような教育や授業が有効かということ、アセスメント結果から分析していきたい。

まず、学生の能力の可視化を行い、それを経年での変化や全国傾向との差異の分析をする。次に、そこで見えてきた傾向、特に「思考力」の伸びやスコアが高い学生に共通して見られる経験値を、「経験」のスコアとクロス分析をすることで、「思考力」上位者に共通して見られる経験は何かということを探る。そして、ここで見えてきた経験を授業やカリキュラムに反映し、教学改善を実践していくという形が実施のイメージになると考えている。来年からは実施2年目以降ということになるため、同一学生群の経年での変化、特に「思考力」の伸びや変化の確認が可能になり、より深い分析や考察を行うことができるが、今年に関しては実施の初年度になるため、今回は全国平均と比較して見えてきた「経験」についての分析を行った。

貴学と全国平均の双方から分析すると、「思考力」上位層の学生ほど「議論する経験」の肯定回答が高いという傾向が見られた。現在、「議論する経験」を多く積むことは大学だけではなく、高校以下の学校教育、さらには企業現場でも注目を集めている部分だ。ここからは、「議論する経験」を積むために実際に行っている事例の紹介をしたい。ある大学では、企業から出されたテーマに対して、チームごとに自分たちで解決策を立案し、それらを企業に提案する授業を行っている。テーマの解決のために、学生たち自身がアンケート調査やヒアリングなどのフィールドワーク、図書館でのデータ収集を行い、チームで解決策を出し合い、時には熱い議論を交わす様子が見られる。解決のために必要だと思うことを自らが能動的に考え、主体的に行動し、解決策をアウトプットすることから、まさに学生に「議論する経験」を積ませる仕組みになっている。

また、全国結果からは見られなかったものの、貴学の受検結果から「多様性を受容する経験（チーム内でトラブルが起こったとき、自ら働き掛けて問題を解決した）」を多く行ってきた学生群ほど、「思考力」のスコアの平均値が高いことが確認できた。この経験も「思考力」に影響を与えるのではないかと考えられる。実際に、この経験を積ませるための取り組みを行っている大学の事例を紹介したい。この大学では、学生に「多様性を受容する経験」を意図的に積ませるための試みとして、授業内におけるグループワークのためのグループ分けを、アセスメント結果をもとに実施している。『GPS-Academic』の測定項目のうち、主体性や積極性を示す「リーダーシップ」と、他者との合意形成力を見ている「協働的思考力」の2軸を設定し、プロットを組んで4象限に分け、それぞれの象限の学生が各グループに1人ずつ所属するような分け方をしている。「リーダーシップ」のスコアが低い学生 A をあえてグループリーダーにし、そのグループに「協働的思考力」のスコアが高い学生 B を入れることで、学生 A にグループリーダーとしての成功体験を積みやすくすることができる。単に勉強ができる、任せやすいという理由でリーダーを選んでしまいがちになるが、客観的な指標を使って教員が指導できれば、こうした日常的な場面でも学生の能力を伸ばすことが可能になるはずだ。

最後になるが、「思考力」を高める方法として、「議論する経験」と「多様性を受容する経験」という2つの経験が有効であると考えられる。今後は、問題解決のサイクルを回していく、つまり、答えのない問いに対して、学生がトライできる機会を日々の授業の中で多く取り入れることが、学生の「思考力」を高めるうえで非常に重要になるだろう。



## 外部アセスメントツールの活用とキャリア形成支援

キャリア開発部長 渡部 博志

本日は、キャリア形成支援という観点から外部アセスメントツールの活用に関連して3つお話ししたい。第一にツールに使われないということ、第二に教員は知のナビゲーターとなる存在であること、そして第三にキャリア形成支援の補完的な機能としてのキャリアセンターの存在についてである。

まずお話ししたいのは、ツールは決して全知全能ではないということである。学生に関することは、ツールから得られる情報だけではない。数値として示されないものであっても教職員が学生と接する中で感じることや把握できる実態も非常に重要で価値のある情報である。それを常に上回る存在として外部アセスメントツールがあるわけではない。ただし、同時に、特に入学直後の新入生について、教職員が直接得た情報だけですべてを把握できているとは言いきれず、ツールから得られる情報にも活用できる点があるはずである。

もちろん、ツールから得られた情報であっても、たとえば集団の傾向を捉える平均値は、あくまでも代表値の一つでしかない。平均値が同じだとしても分散が大きい場合には、分散が小さい場合と比べ直面する状況は大きく異なっている可能性がある。したがって、平均値を絶対視した施策を講じることも不適切であろう。あくまでもツールから得られるデータは解釈を通じてはじめて意味をなすものであり、どのような施策を講じていくべきかを考える一つの補助ツールとして、外部アセスメントツールから得られたデータを利用する必要がある。

その上で、ツールを使用して得られた入学時点のデータは、次の3点で活用できるのではないかと考える。①入試施策やアセスメントポリシーの見直し、②初年次教育への反映、③「個」との対話である。

それぞれについて具体的に説明すると、①については、入試区分別に学生の特徴が違うということが分かれば、学科として入試施策についての評価や検討を行うことができるであろう、ということである。もし入試区分別に違いがないのであれば、さまざまな入試経路を作る必要性はないと考えることもできよう。ただ、どれか一つの入試経路を絞ると、教職員の負担が減るだろうけれども、これまでとは違う結果が出てくる可能性があり、判断は最終的に慎重になる必要もある。

②に関しては、前述のように入学時点で教職員が接し把握した学生の気質や実態は非常に重要な情報として活用できるものであり、ツールから得られたデータを補完的に使用することができる。しかし補完的に用いるにとどまらず、新入生の

傾向の把握や、学修効果を高めるための一つの素材として、授業運営上の変更を検討する材料になり得る可能性もある。経年的にデータが積み重なっていけば、中長期的にはカリキュラム改編に活用するという事も考えられるであろう。

初年次ゼミ等を実施する中で、新入生とアドバイザー教員の面談時に、対話の素材の一つとして外部アセスメントツールから得られた情報を利用できるとも考えられる。これが③で挙げた「個」との対話におけるデータの活用である。卒業まで頑張ってもらいたいからこそ、教員と学生とで現状をお互いに確認することも可能であろう。スコアに一喜一憂して、スコアを上げることを目的とするのではなく、学科での学びを通じてスコアが上がっていくということ、すなわち学科での学びが重要なのだということを伝える機会にもなるはずである。

本日お話ししたい第二の点は、教員は知のナビゲーターとなる存在であるということである。2年前（令和元年度）の後期方針説明会で、クリエイティブな実践者～ここでは、社会における顕在的・潜在的な課題を自ら提示でき、既存の延長線上にないような形で問題を解決していけるような人材として捉えていただきたい～を輩出するためには、学生が変わることだけではなく、教職員自身の変化も必要であるという話をした。その点を振り返りながら少しお話をしたい。

クリエイティブな実践者の輩出という点からは、2年前の後期方針説明会において、受け身の姿勢、自信のなさ、好奇心の不足などが本学学生の弱い部分として挙げられるという話をしたが、それから現在まで、学生は変わっただろうか。当時、この弱さの背景には、自分の意見をフォーマルな形で聞いてもらう経験が少ないために強く語れるようなものがなく自信がないのではないかとということ、また、ルールさえ守れば良いという稚拙な判断基準を持っていてペナルティーに対して極度に敏感であることなども挙げたが、現状はどうだろうか。

クリエイティブな学生は、当事者性を持って一歩踏み出せる人材であることが求められるであろう。また、既に答えがあるわけではなく、さらに課題すら提示されていない中で物事に取り組んでいくうえでは、考え続けられる「思考体力」作りが必要なのではないだろうか。これらを実現するためには、各学科での専門の学びが非常に重要であると考えられる。

2年前に比べると、コロナ禍でオンライン教育の機会が加速したため、学生は大学の授業以外にも学外で良質な教育コンテンツを学ぶことが可能になってきた。このことは、本学の



教職員が学生に何を提供できるのかという点で、コロナ以前から大きく変化した部分であると言える。そうすると、学位さえ取ればよいというディプロマミル（diploma mill）のような存在にならないために、「本学学生を見つめた学修者本位の実現」こそが本学の教職員がなすべきこととなるであろう。つまり、自らの出身校や前任校をベースに考えるのではなく、“武蔵野大学の学生”の成長にフォーカスをするという視点に立って、各学科の専門的な学びを提供するということである。例えば、「本学の学生にとっては〇〇が少し理解しにくいかもしれないので、その部分を少し丁寧に教えていこう」というようなことができれば、本来の意味での学修者本位の実現に近づくはずである。

それが本学の教職員であることの意味だと考えれば、これを体現する教職員は、学生にとっての知のナビゲーターと言えるのではないだろうか。学生の現在地を理解した上で向かうべき方向を示していく存在になるために、本学の学生を客観的に理解する補助ツールとして外部アセスメントツールを活用していくことが一助になると考えられる。

最後に、第三の点として、全学的に提供するキャリア支援について紹介したい。そもそもキャリアとは、厚生労働省の報告書などでは「職業を切り口とした人生の歩き方である」と定義されている。すなわち、人生の歩き方という視点からは、キャリアが働くことに関わる「継続的な過程」と、働くことにまつわる「生き方」そのものを考えることと捉えることができる。そのため、就職活動はキャリアにおける一部分でしかない。「キャリア=就職」と考える方がいるが、それは誤りであり、大きなキャリアの中の一部分に就職というイベントがある、と考えていただきたい。

そのうえで、大学や学科での学びがキャリアに関係する理由についてお伝えしたい。学生は大学での学びを通じて「考え方」を習得し、それが世の中の「見方」を規定することになる。そのため、学びは働くことにまつわる「生き方」に影響し、その人のキャリアに影響を与えることになる。中でも、大学での学修量の大半を占める学科での専門の学びというものは、生き方やキャリアに対する影響も大きい。教員は専門の教育を通じて、考え方や生き方をも伝えており、それが広い意味ではキャリアに関わってくるということである。各学科の「学生をどのように育てていきたいか」という方針は、キャリア形成支援につながっているのである。

各学科の専門的な学びがキャリア形成の主軸になっていくが、キャリアセンターは全学共通の教育組織として、学生のキャリア育成を支援するための補完的な役割を担っていきたい。具体的には、『武蔵野 INITIAL（全学生が1年次に履修する全学共通基礎教育）』におけるキャリア教育の担当や、全

学方針を反映する学びの場の提供などが挙げられる。

『武蔵野 INITIAL』体制となるタイミングでキャリア教育の科目も大きく組み替え、各学科での学修機会を阻害しないような制度設計とした。キャリアセンターが提供する科目群は、『キャリアデザイン科目』と『インターンシップ科目』の大きく二つに分けられる。

『キャリアデザイン科目』では、1年次には自らのキャリアを築いていくために必要な、基本的な知識や能力、心構えなどを理解してもらう内容になっている。2年次には、事前・事後学修をキャリアセンターで行ったうえで、各自がインターンシップに参加し、卒業後のキャリアをより具体的に考え始められるような支援を行う。実際に社会に出ればさまざまな専門の人と一緒に問題を解決していくことになるため、そのようなことが大学の中でも疑似的に経験できるよう、他学科のメンバーとともに学外のコンペティションに参加する、というようなことができる場の提供も行っていく。

『インターンシップ科目』は従来からあったものであるが、卒業後のキャリアとして自分はどのような方向を目指すのかを考えるきっかけになるような就業体験機会を提供している。また、企業が抱える課題を学生が一緒になって取り組む『企業協働プロジェクト』というものも実施する。単純にインターンシップで何か経験をすることを超え、学生が社会における具体的な課題に取り組むことを通じて自らの強みと弱みを理解するとともに、視野を広げることを意図したものである。

学生のキャリア形成支援のために、キャリアセンターとしても外部アセスメントツールを活用していきたい。本学にはキャリアアドバイザーが在籍しており、学生が相談に利用することができるので、この時に、対話を行う際の一つの素材としてツールの活用を考えている。各学科におけるアドバイザー教員との面談時だけでなく、同様にキャリアアドバイザーとの面談でも利用することで、学生の特徴や過去の取り組み、得意なことなどを話しながら、学生本人の今後の生き方について考え、将来の選択肢を広げるきっかけとして利用していきたいと考えている。例えば、大学1年生になったばかりの段階では、世の中にどんな仕事があるのかということを知らない学生が多く、キャリアというものを狭い範囲でしか捉えられていない場合がある。そこで、「外部アセスメントツールの結果でこういうことが表れているので、こんなことも考えられそうですが、どうですか」といったように、キャリアアドバイザーとの面談でさまざまな可能性について示すことができれば、学生本人の学ぶ意欲や、個人の目標設定を促すことを刺激できるのではないだろうか。このような取り組みを通じて、全学組織としてキャリア形成の支援に努めていきたいと考えている。



## 発達障害とその支援のありかたを考える

明治大学子どものこころクリニック院長・明治大学文学部心理社会学科特任教授 山登 敬之 氏

本日は、①発達障害の概論と精神科の病気の考え方、②発達障害を「マジョリティとマイノリティの問題」として考えるという提案、③大学における支援や合理的配慮、④二次障害についての4点を中心にお話したい。

まず、発達障害について、説明の仕方はいろいろあるだろうが、ここでは「人生のかなり早期から、脳が特徴的な発達をみせるため、知能や社会性や自己制御の力がバランスよく育たず、年齢に期待されることが上手にできないこと」としておく。大学入試を経て入学してくる学生の中に、知的能力障害を持つ方は基本的にいないと考えられるため、主に自閉症スペクトラム障害（ASD）、注意欠如 / 多動性障害（AD/HD）、限局性学習障害（SLD）の話をしていただきたい。大学で出会う発達障害の学生は、この三つのうちのいずれか、あるいは、いくつかの障害が重なっていると考えると良いだろう。では、具体的に何が上手くできなくて困っているのか。

ASD では、自分や他人の感情の動きが読み取れないため上手に人間関係がつかれない、集団になじめない。また、こだわりが非常に強いと上手に感情や行動の切り替えができない。AD/HD では、注意集中が難しいため気が散りやすく上手に作業が進まない、また、衝動性が強いために、待たられない、我慢ができない。さらに、時間処理もうまく働いていないという説もあり、見通しが立てられない、約束の時間に間に合わないといったことが起こる。SLD では、全般的な知能は平均、あるいはそれ以上のレベルであっても、読字障害、書字障害、計算障害など、読み書き計算のどれかに上手にできないものがある。

発達障害が複雑なのは、障害がそれぞれ重なっているところや、症状が年齢や環境によって姿を変えていくところにある。障害の性質上、決定的な診断の決め手に欠け、診る人によって診断が異なったり、「グレーゾーン」と言われたりすることも少なくない。

ところで、「大人の発達障害」という言葉を見聞きするが、これは「大人になってから発達障害があるということがわかった」という意味である。それまでは何とかこなしていたが、成人してから何かのつまずきをきっかけに障害があることがわかったというケースを指す。同じ障害を抱えていても、幼少期から分かっていた人と成人して気が付いた人では、だいぶ事情が異なる。大学の支援という視点から考えると、前者の場合は、

受験時や大学入学の時点で学生側のニーズを聞くことができるが、後者の場合、当人も困ってはいるが何をどうしてほしいかよくわかっていないことが多く、障害を疑えるのか否かの段階からしっかりと話を聞く必要がある。

次に、精神科の病気の考え方について、発達障害も含めて説明しよう。精神科の病気を個人と環境要因の掛け合わせで起こると考えてみる。人間は身体がベースであり、その身体を動かしているのは脳という臓器である。環境からの刺激を、脳が身体感覚神経を通して汲み上げ、情報をふるいにかけて身体を動かし、同時に自律神経を介して内臓も動かしている。さらに、脳は感情や意欲を生み出してその人の行動を決めている。私たちはこの行動の束を個人の性格として捉えている。このような外界の刺激に対する反応や行動が常識的な範囲から著しく逸脱していると捉えられる場合、精神科医は病気を疑う。そして、それは原因不明の身体症状や、通常では理解できない奇妙な言動として現れる。

個人を集団の中に置いてみると、病気のときはみんなと違うが、病気が治ればみんなと同じだ。ところが、みんなができることができなかつたり、みんながしないことをしたりする人は、いつもみんなと違うとみなされてしまう。発達障害やパーソナリティ障害というのは、こういう人たちのことなのだが、本人にしてみればいつもと同じ自分であるから、障害とされるのは納得できないという話にもなる。

そこで、「できる／できない」、「違う／違わない」という見方をやめ、発達障害をマイノリティの問題として捉える「発達マイノリティ」という考え方を提案したい。

東田直樹さんという自閉症の作家は、言葉は話せても会話ができず、AD/HD のような症状もあるが、小さい頃から文章を書くことを覚え他者とのコミュニケーションを可能にした。彼が中学生のときに執筆した『自閉症の僕が跳びはねる理由』という本とその続編が、10 年ほど前に英語に翻訳され『THE REASON I JUMP』というタイトルで出版されて英国と米国でベストセラーになった。現在では世界 30 カ国以上で読まれている。

東田さんは、2013 年8月に開催された『希望を語る — 自閉症、その内面の世界』という講演会で次のように述べた。「自閉症者にとってつらいのは、普通の人ができることができないことではなく、できない気持ちをわかってもらえないことではない



のでしょうか。「僕は当事者ですが、だからといって、みなさんと違う種類の間人ではありません。配慮は必要かもしれませんが、区別はされたくないのです」

私は、この少し前に東田さんと知り合い、こうした彼の言葉に触れるうちに「発達マイノリティ」の発想を得た。発達障害の考え方に倣えば、発達マイノリティは生物学的に（発達の仕方）に特徴がある。発達障害の人たちは発達においてマイノリティ（少数派）であるが、世の中はマジョリティ仕様にできているため、社会的に不便をこうむったり、不自由を感じていたりする。マジョリティがマイノリティに対して親切であるべきことは、人道的観点からして異論はないだろう。それゆえ、マイノリティの人たちには配慮（思いやりや社会的サービス）が必要になる。いっぽう、人は誰でも社会的に区別されるのを嫌うから、配慮や支援にあたっては注意が必要である。マジョリティは自分たちの都合でものを考えがちなので、この点にはとくに注意したい。

以上を踏まえて、発達障害の支援と合理的配慮について解説する。ここでいう支援とは、医学的治療や能力向上を意図した訓練、環境調整（社会的障壁の除去）のことで、合理的配慮とは、この環境調整を意味する。

2006年4月に施行された『障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律』の中で、障害者に合理的配慮を提供することは社会の義務と明示された。逆に言えば、配慮しないと差別に当たるということになる。合理的配慮の要件として、①特定の状況で生じている困難については機能障害を踏まえた配慮が必要、②事務事業の本質を変更しない適当な配慮であること、③事業者に過重な負担を課さないこと、の3点が挙げられる。

①の「機能障害」の判断については医学的な判断が必要になるが、医師によってはグレーゾーンとみなして診断書を出さない場合がある。その際は、発達障害に似た問題を抱えて困っている学生に対する支援について、大学側で個別に考える必要がある。②にある「事務事業」は大学では講義や学生の指導ということになるが、その本質を変更しないという判断はなかなか難しい。例えば、ディスカッションやディベートの能力それ自身が評価の対象になる授業などは、対人緊張が強くコミュニケーションが苦手な ASD の人たちにとってはハンディがある。それがわかっている、全体の公平性を考えると評価はなかなか難しく、どのような配慮をすればいいのかも悩むところだ。③については、学生の話聞くことも必要だが、あまりに長時間になると教職員の身がもたないだろうから、どこかで線を引いて考える必要がある。

当事者の間でも「どうして生きづらさが生まれるのか」を研究する動きが何年も前から始まっている。綾屋紗月は『発達

障害当事者研究』の中で、自閉症を「身体内外からの情報を絞り込み、意味や行動にまとめあげるのがゆっくりな状態。また、一度できた意味や行動のまとめあげパターンも容易にほどけやすい」と独自に定義している。習慣や常識がなかなか身に付かないのはこういった理由からだということ踏まえたうえで、当事者の話をよく聞き、支援策について互いに話し合っ決めていくことが望ましい。

大学における支援にあたっての心がまえとしては、まず障害の特徴をよく知るとともに、当事者は自分ができないことやみんなと違うことに気が付いており、そのことで傷ついているのも知っておく必要がある。基本は放置しないことであって、いつか分かるだろう、本人が気付かなければ駄目という考え方では不親切だ。できないことは手伝う、分からないことは教えるという姿勢で、指導というより解説するような態度で臨むことが重要である。

本人のやり方やこだわりを否定しないことも大事だが、時間がいくらでもあるわけではないので、繰り返しや確認については制限付きで付き合う。また、返事や説明、指示は簡潔かつ明確に伝えるよう心がけ、話を通じ難いと感じたときには、文書や図にして渡すなど工夫してみるとよい。

最後に、発達障害から別の病気が発症する「二次障害」について簡単に触れておく。先の説明で、精神科の病気は個人と環境要因の掛け合わせで生じるといったが、同じ環境に置かれても個人によって発症することもあればしないこともあるというのは容易に想像がつくだろう。外界の刺激に対する感受性や反応は、個人の身体や性格によってそれぞれ異なるからである。例えば、ASD の身体が綾屋紗月のいうようなものだとしたら、環境に適応するには相当な困難や苦労があるはずだ。おまけにその環境は、先に述べたようにマジョリティ向けにできているのだから、マイノリティの彼らが被るストレスは大きい。つまり、発達障害の人たちはもともと脳神経系がデリケートにできているうえに、日頃からストレスフルな状況を生きているということであって、そのぶん病気になるリスクが高いのである。

実際に、発達障害に統合失調症や躁うつ病などを合併する例は珍しくなく、その場合には、それらの病気の治療を優先して行うことになる。これ以外にも、不安障害や強迫性障害、睡眠障害、女性では摂食障害なども二次障害として併発しやすい。逆に、こうした診断を受けて通院している人たちの中に、「大人の発達障害」が見つかることもあるので注意しなければならない。

# 情報セキュリティについて

## ■目的

ICTの利活用により、映像を活用した講義や遠隔地との接続による双方向の学修が可能になるなど、新たな学びを実現できている一方で、ウイルス感染、不正アクセス、情報漏洩等の多様なリスクへの備えが必要となる。テスト形式の e-Learning を実施することで、大学における情報セキュリティの基本知識を学び、個人情報漏洩等を防止する機会とする。

## ■開催概要

- テーマ : 情報セキュリティについて
- 実施方法 : テスト形式の e-Learning
- 実施時間 : 30分～50分程度(目安)
- 対象者 : 大学専任教員



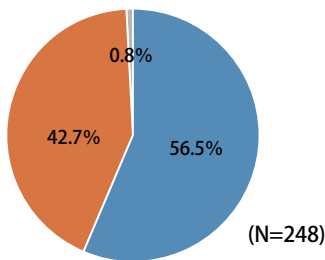
※パナソニック ソリューションテクノロジー株式会社 eラーニングの様子

## ■e-Learning の内容

情報セキュリティ入門、パスワード管理、ウイルス対策、個人情報保護、テレワークなどに関するテスト形式の e-Learning を受講。53問中、正解数が48問に満たない場合、合格ラインに到達するまで複数回実施する。

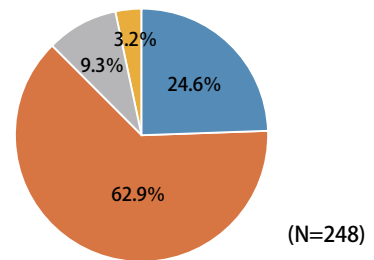
## ■参加教員のアンケートより

【理解度】



- とても理解できた
- 理解できた
- あまり理解できなかった
- 全く理解できなかった

【満足度】



- 非常に満足
- 満足
- やや不満
- 不満

## 【研修による気づき、整理できた点等に関するコメント(一部抜粋)】

- ウェブブラウザのパスワード保存機能に問題があることは意外であったが、認識できた。また、ソーシャルメディア上での短縮URLの危険性について認識できた。
- 解説があったので理解しやすく、全体的にセキュリティに関する理解が深まった。ウイルスに感染した恐れがあるときはネットワークからパソコンを切り離すなど、自身の行動レベルでどのように対応すれば良いかがよくわかった。
- 営業秘密について、「マル秘」等の表示をすれば鍵のかからない場所に保管しても法的な保護を受けられることは意外でした。
- デジタル・アナログともに、技術的な問題以上に、セキュリティ意識を明確にすることが大切だと思いました。
- 自分のセキュリティの知識をアップデート、再確認することができた。特にテレワーク時は、気をつける必要があると確認できた。
- 情報管理について普段自分がとっている認識・行動が適切であるということが整理できた。研究に関する外部とのやり取りについてはまだ経験がないため、改めて勉強できてよかった。



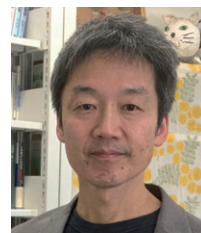
## 『問い』から始まる授業設計

### ■目的

第1回全学 FDSO 研修会で示された令和3年度 FDSO 運営方針に基づき、本学の新たな学びのスタイル「響学スパイラル」を実現していくために、実践的なワークショップ型のFDを実施する。

### ■開催概要

- テーマ : 『問い』から始まる授業設計
- 内容 : ①村松教務部長より「響学スパイラル」について解説  
②問いから始まる授業設計について、講師によるワークショップ型でFDを実施
- 講師 : 佐藤 賢一先生  
(京都産業大学 生命科学部 教授、NPO 法人ハテナソン共創ラボ理事長)



### ■タイムテーブル

響学スパイラルの解説	村松教務部長より説明	10分
ワークショップ 『問い』から始まる授業設計	佐藤先生によるワークショップ ・プロセスとねらい（講義＋ワーク） ・教育効果メタ分析（ワーク） ・企画書づくり（ワーク）	180分
質疑応答		15分



### ■参加教員のコメント

- 問いを作るためにどのような点が重要なのか、また、手法なども知ることができた。自分が参加者になることで、問いを作ることがそう簡単でないことが実感できた。
- そもそも「問いづくり」の発想・知識がなかったので、いい勉強になった。また、他学科の先生方のご意見を伺うことができ、多角的な視点から考察ができて、いい経験になった。
- グループワークで学生に求める答えや成果については考えてきたが、その前提となる「問い」の重要性への意識は薄かったので、大変勉強になった。

ご所属

いまある  
ハテナ



# 令和3年度 FDSD 検討小委員会の活動

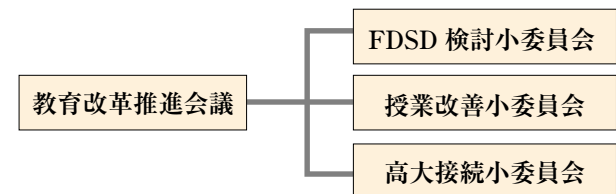
## FDSD 検討小委員会メンバー

委員長	村松 陸雄	教務部長
	伊藤 泰彦	学生部長
	渡部 博志	キャリア開発部長
	佐俣 紀仁	法律学科 准教授
	高松 宏弥	アントレプレナーシップ学科 講師
	小野 健太郎	教育学科 准教授
	間中 和歌江	教養教育部会 准教授
	大崎 理乃	MUSIC 講師
	和賀 信之	教育企画部長兼教育企画課長

## FDSD 検討小委員会における審議事項

令和4年3月4日（金）  
議題：令和3年度FDSD活動の振り返り及び  
令和4年度FDSD活動計画について

## 教育改革推進会議小委員会設置状況



# 令和4年度 FDSD 活動計画について

## 1 令和4年度 FDSD 運営方針

### ◇学修者本位の教育の推進

- 『何を教えたか』から『何を学び、身に付けることができたのか』へ
- 響学スパイラルの授業への展開を推進する

### ◇学科・研究科主体のFD活動を推進

- 『中長期計画』『出口保証』『教育の質保証』に対し、各学科・研究科が目標達成に向けた自由度と裁量を持ち、学科・研究科主体のFD活動を推進する
- 各学科が4年に1度程度学生FDを実施し、学科内で学生の授業への主体的参加をより高めるための課題、ノウハウ、スキルを共有する

### ◇教員の主体的な参加を推進

- 教員の主体的な参加を推進するため、授業実施上の課題に対応するワークショップ形式の研修を推進する

### ◇教員に必要な知識及び技能習得の推進

- 大学方針説明会を年2回実施し、全教員に大学のビジョンや方針を共有する機会を設け、大学全体の機能強化を図る
- 全教員が3年に1度程度『建学の精神』『ハラスメント』『障害学生の修学支援』等について理解を深めるための研修を推進する

## 2 令和4年度実施計画（案）

開催日	テーマ等	講師	備考
<b>◆全学 FDSD</b>			
5月21日（仮）	響学スパイラルの取り組み事例について	学内教員	対面であれば同慶節開催日
5月～6月頃	ハラスメント研修	—	e-Learningによる実施を検討中
9月21日（仮）	未定：響学開発センターにて企画検討する	学外教員又は学内教員	後期大学方針説明会予定日
<b>◆目的別 FDSD</b>			
4月1日～	響学スパイラルの説明	村松教務部長	新任教員研修として動画配信
11月18日（仮）	ワークショップ型FD（テーマ：グループワーク、アクティブラーニング）	学外教員	
1月13日（仮）	未定：響学開発センターにて企画検討する	学外教員又は学内教員	
<b>◆学科 FD ※各学科の状況に応じてテーマを検討。以下は推奨テーマ案</b>			
年度内	学生FD（テーマは各学科で設定）	学内教員	R4年度実施予定学科：日文、GC、JC、法律、経済、社福、幼教、看護
年度内	学科カリキュラムにおける響学スパイラルの実践について等（各学科で設定）	学内教員	
<b>◆研究科 FD</b>			
年度内	オンラインによる研究指導について／研究倫理指導について等（各研究科で設定）	学内教員	



# 令和3年度 授業改善小委員会の活動

## ■授業改善小委員会メンバー

村松 陸雄	教務部長	泉 明宏	准教授 (人間科学科)
伊藤 泰彦	学生部長	林 浩一	教授 (MUSIC)
三浦 裕子	教授 (日本文学文化学科)	和賀 信之	教育企画部長兼教育企画課長
藤本 かおる	准教授 (日本語コミュニケーション学科)	鈴木 大介	教務課員
深谷 健	教授 (政治学科)	中村 柚香	学部事務課員
松岡 佑和	准教授 (経済学科)	足立 京子	教育企画課係長

■目的 問題意識に基づく挑戦的な授業を設計・実践・評価し、体系的に知見を蓄積する。

■活動 第1回：令和3年10月8日（金）「令和4年度授業改善トライアルの募集について」  
第2回：令和3年11月30日（火）「令和4年度授業改善トライアルの選定について」

## ■授業改善トライアルとは

### 【トライアルの概要】

- 授業改善に向けた取り組みであれば、その内容・手法は問わない。
- 意欲的な新たな試みに対し、取り組みの成否は問わないが、効果や変化に対する報告を求める。
- 1申請に対する支援額の上限：受講生数に応じて最大20万円とする。
- ★令和4年度の募集から、武蔵野大学の学びのスタイル「響学スパイラル」を取り入れている授業を支援対象とする。

### 【トライアルに求める成果指標】

- 下記(1)～(3)の全てあるいはいずれか。
- (1) 授業内容の理解度を深める。
  - (2) 学問的、知的興味・関心の広がりにつながる。
  - (3) 授業以外の学修時間の伸びにつながる。

### 【令和3年度 授業改善トライアル選定事業一覧】

No.	教員名(敬称略)	トライアル名	対象科目名	対象学科・学年・開講学期
1	高橋 桂子	「Grammar Video for Genki」導入による 初級日本語科目への反転授業	日本語 1ABCD 基礎日本語 1ABCD	グローバルビジネス学科 1年次 1～4学期
2	宍戸 拓人	ゼミ教育へキャリア教育を融合させる	ゼミナール1 ゼミナール2	経営学科 3年次 1～4学期

### 【令和4年度 授業改善トライアル選定事業一覧】

No.	教員名(敬称略)	トライアル名	対象科目名	対象学科・学年・開講学期
1	杉野 綾子	シナリオプランニング手法を活用したりサーチ力の 向上	日本政治・政治過程 演習1・2	政治学科 3年次 2・3学期
2	津吹 達也	双方向オンラインセッション+現地渡航を活用 した海外(アジア)PBL	ゼミナール1	アントレプレナーシップ学科 2年次 3・4学期
3	大崎 理乃	生活と授業を連携した「気付き」による学修の 拡張	サービスデザイン [a]	全学科 2年次 4学期

# 令和3年度 授業改善トライアルより ～授業改善事例の紹介～

## ＜事例1＞

トライアル名：「Grammar Video for Genki」導入による初級日本語科目への反転授業  
 科目名・対象：「日本語 1ABCD」「基礎日本語 1ABCD」  
 グローバルビジネス学科 1年次 1～4学期 火曜1・2限  
 担当教員名：ランゲージセンター 高橋 桂子 助教

### ●トライアルのねらいと内容

本トライアルは、文法理解促進と、授業内での日本語コミュニケーション活動の確保を目的としている。

これまで、シラバスで反転授業の手法を用いて「教科書の文法解説（英語）を読むこと」「教科書に準拠した文法解説ビデオを見てくること」を予習課題としてきたが、予習は学生の学習意欲に委ねられており、予習が十分でない学生はなかなか日本語力を伸ばすことができなかった。また、文法理解を測定するために授業時間内に文法クイズを実施し、その分授業活動時間を取られてきた。

「Grammar Video for Genki」は無償のビデオとは異なり、確認クイズが付いていて、Google Classroom に配置すると、このクイズの成績を学生の最終成績と紐付けることができ、全員の講義ビデオ視聴を促すことができる。クイズは締切前なら何度でも受けることができ、受けた中での最高点が記録されるシステムとなっているため、学生たちの参加意欲を刺激する構造となっている。そこで本トライアルでは、この「Grammar Video for Genki」を用いることで学生の予習を充実させ、文法理解を促進するとともに授業時間内の日本語コミュニケーション活動の充実を目指すこととした。

### ●成果検証結果

当初、前年度との定期試験の到達度の比較による検証を計画していたが、コロナ禍のもと、令和3年度新入生が全員未入国のままであるため、想定と全く異なる環境となった。それに伴い、定期試験の内容と出題形式の変更を余儀なくされたため、学生と授業担当講師への質問紙調査へと検証方法を変更し、実施した。

到達目標	検証結果
ビデオ視聴を通し、授業前に、授業で扱う文法を理解した状態で教室活動に参加できる	学生への調査結果を見ると、「げんきビデオを授業前に見ることによって、文法項目を事前に理解し、クラス活動に集中することができた」と9割の学生が回答している。 講師への調査では「全員が海外からの授業参加で、日本で実際のコミュニケーションに触れる機会が全くない学生たちにとって、日本語文法の構造を英語で事前に理解することは、本年度の学習環境には特に有効であった」と担当講師全員が回答している。
自律学習の習慣が定着する	確認クイズの提出率は春入学生・秋入学生ともほぼ100%であった。評価対象としたこともあるが、実施状況はすこぶる良好であり、自主的に繰り返し使用する学生も見られた。

さらに、当科目の最終成績について、例年どうしても数名出してしまう C 評価の学生が今年度は1人もおらず、全体の学力の底上げという面でも効果があったと考えられる。

### ●担当教員総括（授業改善トライアルに採択され、実施してみた感想等）

グローバルビジネス学科の国際学生は、専門科目は英語で学ぶという一般的な留学生とは異なるユニークな存在である。日本語の学力は不問のため、日本語がゼロビギナーの学生も多く入学するが、それらの学生も含めて、日本で「生きる力」の基盤となる日本語のコミュニケーション能力を授業の中で育てていかなければならない。メインテキストに加えて、アメリカの大学で使用されている本ビデオ教材を本格的に導入したことで、あらためて日本で生活するためのコミュニケーション能力を、「げんき」という教科書を使用してどう育てた方がいいかという見つけ直しが講師間で起こり、教授法、評価法の共有が進んだ。

令和4年度は今までそれぞれが進めていたシラバスと評価を、本ビデオ教材導入をめぐる協働を通し、全クラス統一に改定し、新学期に臨む。これからも学習環境をはじめとする様々な変化に対応し、よりよい授業構築を担当講師の方々と試みていきたい。



## ＜事例2＞

トライアル名：ゼミ教育へキャリア教育を融合させる

科目名・対象：「ゼミナール1」「ゼミナール2」

経営学科 3年次 1～4学期

担当教員名：経営学科 宍戸 拓人 准教授

### ●トライアルのねらいと内容

本トライアルでは、「授業内容の理解度向上」「意欲・興味・関心の広がり」「学修習慣への波及」を目的として、ゼミナール(組織心理学)の学びとキャリア教育を融合させる取り組みを行った。具体的には、キャリア教育の専門家と協力して、キャリア教育に関するワークショップを毎月1回開催し、キャリアについての理論と組織心理学の理論とが結びついていることを理解できるよう授業設計を行った。

#### 【ワークショップ概要】

外部講師：小島 聖子 先生

開催日程		内容
第1回	前期	令和3年4月15日(木)
第2回		自己紹介、自己理解ワークショップ
第3回		令和3年6月24日(木)
第4回		アセスメント実施、他者理解ワークショップ
第5回	後期	令和3年7月8日(木)
第6回		インターンシップとキャリア・デザインについて
第7回		令和3年7月15日(木)
第8回		アセスメント結果返却、自己理解ワークショップ
第9回	後期	令和3年10月21日(木)
第10回		アルバイト経験等から職務分析を行い、自己理解・職種理解を深める
第11回		令和3年11月4日(木)
第12回		事前課題(ライフラインチャート)を通して自己理解・他者理解を深める
第13回	後期	令和3年12月9日(木)
第14回		社会人(営業職)との対話を通して自己理解・業界分析を考える
第15回	後期	令和4年1月20日(木)
第16回	後期	事前課題(ガクチカ、5年後の自分)を通して自己理解・他者理解を深める

### ●成果検証結果

「授業内容の理解度向上」「意欲・興味・関心の広がり」「学修習慣への波及」のいずれの目標も、ワークショップを通じた定性的な方法と、アセスメントを通じた定量的な方法を通して検証を行った。

定性的な検証については、対話や提出物を通して定点観測を行った結果、昨年度以上の教育効果が確認された。例えば、組織心理学の理論を学ぶ際にも、キャリアについて学ぶ際にも、対話や課題において深いレベルで自己開示を行うことが求められる。その観点からすると、前期には自己開示を行わなかった学生の多くが、講義やワークショップを繰り返す中で、すすんで自己開示を行うようになり、自分の学びだけでなく周りの人の学びにも貢献するようになった。このような変化は昨年度までのゼミでは見られなかった点であるため、大きな成果だと考えられる。

その一方で、毎月のアセスメントを通じた定点観測はあまり効果的ではなかった。アセスメントの直前において生じたことに学生の回答が強く影響を受けるため、パルスサーベイとしては活用可能ではあったが、学生の成長といった大きなトレンドを捉えるには適さなかった。

### ●担当教員総括(授業改善トライアルに採択され、実施してみた感想等)

キャリア教育の専門家と協力して講義の設計・実施を行う中で、私自身のキャリア教育についての理解が進んだ。その結果、トライアル対象以外の講義においても、キャリア教育に結び付けた講義を行えるようになった。特に、1年生の講義や、さらには入学前教育といった就活自体をまだ意識していない学生達に対して、通常の教育の中でキャリアを意識させられるようになったことは、大きな意味を持つと考えられる。

# 令和3年度 授業評価アンケートを踏まえた 学科 FD の推進について

## 〈授業評価アンケート概要〉

- 教育の質保証のため定量、定性的評価、学生の実態把握を行う。また、学科の教育改善に資する情報、分析観点を増やし、各学科のFD 活性化につなげる
- 原則、全学部・全学科の科目を対象に実施する
- 各学期のアンケート実施期間中の授業時間内<sup>\*</sup>で実施（所要時間約10分程度）する  
※オンライン授業の場合は、授業時間外で実施するよう案内する等、状況に応じて対応

## ■目的

令和3年度1・2学期授業評価アンケート結果を基に、以下を検証する。

- ①科目のアセスメント：科目ごとの学修成果の達成状況を確認する
  - ・課題を可視化し、改善策を学科内で共有する
  - ・授業への主体的参加をより高めるための課題、ノウハウ、スキル共有の場とする
  - ・授業運営におけるGP（Good Practice）を見つけ出し、教育の質向上を図る
- ②学科カリキュラムのアセスメント：学科の教育課程全体を通じた学修成果の達成状況を確認する
  - ・科目の体系性・適応度を検証し、教育改善につなげる
  - ・カリキュラム再編成に向けた検証を行う

## ■実施内容

### 実施期間

令和3年11月4日（木）～令和4年1月14日（金）

活用データ（データ内容は、令和3年度1・2学期授業評価アンケート結果）

- 授業評価アンケート基礎集計：各設問の回答結果の学科別基礎集計
- 重点改善要素：授業満足度と各設問との相関から、「重点改善要素」をピックアップした資料
- 科目別授業評価結果一覧（シラバス記載のアクティブラーニング要素とDP・到達目標管理表<sup>\*</sup>に対応）：科目の授業評価結果、到達目標（DP1～DP4）の達成状況 など

※学科 DP 実現のため、科目ごとに、学科 DP の能力分類に対応する関連度を可視化し、それに応じた到達目標を設定している



## ■実施報告（一部抜粋）

## （1）令和3年度武蔵野大学中長期計画指標の達成に向けた検証

各学科報告書より、理由が明確に述べられているもの、学科特性や個別の授業の範囲に留まらず他学科の参考となるようなものを一部抜粋した。太字は、特に具体的な対策と思われる箇所。

## ①授業外の学習時間（全学目標：1科目あたりの予復習時間1時間以上）

## &lt;具体的改善案（未達成要因の改善策）&gt;

- 学修時間の長い科目では、毎回 Web テスト課題（成績評価に含まれる小テスト）を実施し、**演習・復習の機会を多く設定**している。[経済学科]
- 授業内での**演習、反転授業、動画収録**を実施し、学生の自主的学修を促すようにしている。[データサイエンス学科]
- 講義科目の中でも、選択科目における達成度が低い傾向がみられる。現在、学科ではカリキュラム改訂に合わせて、全クラス統一の授業内容・課題を設定しており、予復習時間の底上げを図るよう取り組む。[社会福祉学科]
- 各教員の各授業を紹介し合う形で、どのような予習・復習の手法がなされているかを共有していきたい。ただし、予習復習は学修のための手段に過ぎないので、予習復習を取り入れること自体が目的とならないようにしていきたい。[教育学科]
- 授業前の課題と授業後の振り返りの課題をセットで出すようにするなどの工夫を行う。[幼児教育学科]
- こまめにリアクションペーパーを提出させ、それに対するフィードバックを図るなど、相互的交信の頻度を上げることで、改善が図られると考える。[教養教育]

## ②授業の理解度（全学目標：理解できた学生の割合が70%以上）

## &lt;現状分析（達成要因）&gt;

- 必修科目では、1クラス最大25名程度の少人数クラスでの運用をしている。**各個人の理解度を教員が把握し、フォローできる体制を整えた**。[アントレプレナーシップ学科]
- 非常勤を含む教員の丁寧な資料作りや授業準備、リアクションペーパーなどによる学生の反応を踏まえた授業運営**によるものと考えられる。一方、オンライン授業による資料作成、授業運営にかかる教員の負担増によってこの理解度が維持されていることに鑑み、TA・SAなどの更なる活用が必要である。[人間科学科]
- 学びの目的と学修内容を知る、又は技能を修得する喜びを体験**できたから。学修者が自分のこととして捉えた結果、理解度の向上に繋がったと分析している。[建築デザイン学科]
- 授業の理解度は、表現・実践系の授業が高い。授業外の学修時間は少ないが、**自分の経験を通じて学修する工夫がされているため理解度が高い**と考えられる。講義系で理解度が高い授業では、ノートを作成するなど、講義内容を自分で考えてまとめる課題の設定を行っている。[幼児教育学科]

## &lt;具体的改善案（未達成要因の改善策）&gt;

- (学生の傾向として) どちらともいえないという層は理解していない可能性があることに注意が必要である。授業を理解したかしていないかの評価はテスト、レポートで行っている。満足という指標だけでは主観的でここから何か得るのは難しい。成績と満足という相関などがほしい。[数理工学科]

## （2）DP 検証（アクティブラーニング実施率及び DP・到達目標管理表設定率等から）

各学科報告書より、理由が明確に述べられているもの、学科特性や個別の授業の範囲に留まらず他学科の参考となるようなものを一部抜粋した。太字は、特に具体的な対策と思われる箇所。

## ①DP1&lt;知識・専門性の到達目標&gt;の達成状況に関して

現状分析	具体的改善案
最先端科目であり、学修の最終到達点でもあるゼミにおいて、良い結果が得られた。DP1とDP3は高い正の相関がみられる。[経済学科]	基礎科目群、応用科目群、最先端科目群ごとに <b>シラバス・授業内容について担当者間で情報を共有・検討</b> する。加えて、 <b>学生主体のFD</b> を実施し、アクティブラーニング等への還元をはかる。[経済学科]

<p>知識や技能の修得に関して、授業収録映像を配信し、それを学生が復習などに用いることができた点が昨年度に引き続きよかったが、やはり、知識の定着を図る上での「試験」の実施がオンライン環境下では難しいことが悩ましい。[経営学科]</p>	<p>オンライン試験については、一部教員が様々な形でトライアルしており、それを FD 等を通じて学科内に共有していきたい。また、コロナ禍が多少収束すれば、試験のみを対面実施するような授業形態も選択肢に入ってくるのではないかと思われる。[経営学科]</p>
<p>資格課程科目及び演習科目の評価ポイントが相対的に高く、DP1の高い科目は該当する他のDPも高い傾向が見受けられた。[人間科学科]</p>	<p>知識・専門性の到達目標を設定している科目においても、ディスカッションやグループワーク等を活用しているものが多かった一方、DP1の関連度を「関連大」に設定している科目では「講義のみ」の形態も目立った。 アクティブラーニング=学修者主体の授業設計であれば、講義のみであっても適切な発問の設定によって十分にアクティブな要素がある。また、そうした講義中心の授業も含めて多様な形態から学修する力を身に付ける方が、これから社会で活躍する柔軟性が養えるのではないかと考えている。[人間科学科]</p>
<p><b>【DP1～4共通】</b> DP1の知識の修得には問題はなかったが、その知識を生かして、実際の対象者に看護を实践するDP2、DP4には課題が残った。各科目で学んだ知識は次の科目で活用する必要があることが理解できていない。[看護学科]</p>	<p><b>【DP1～4共通】</b> 学生が講義で学んだ知識を次の科目で活用できない点においては、教員自身も自分の<b>講義で教えた知識を次のどの科目でどのように活用できるのかを学生に示す必要があること</b>、そして学生自身にどのように学修を積み重ねていくのかを教えるべきである。[看護学科]</p>
<p>オンライン授業の際に、聴講する学生の顔が見えず、講義中の様子が把握しづらい。また、授業中に、瞬時にネット情報が見られるので、課題作成に関して問題が残る。[教養教育]</p>	<p>教養教育の科目が多岐にわたるので、それぞれの特質に合わせて効果的なカリキュラム改善を行う。特に、教養教育（CHP：SDGs 基礎、発展）では<b>到達目標の共有を図る必要がある</b>。[教養教育]</p>

②DP2<関心・態度・人格>の達成状況に関して

現状分析	具体的改善案
<p>1・2学期開講の学科専門科目では、到達目標管理表設定率が8割に満たない項目があり、到達目標の内容に改変、改善の必要等がないか点検・検討する必要がある。[日本文学文化学科]</p>	<p>学科専門科目のうち、1年次前期から履修可能な科目に DP2 の授業評価アンケート結果 Q15・17 の回答値がやや低いものがある。低学年の学生には学修に困難があることが想定される。当該科目の開講年次の点検を行い、学則変更を伴うカリキュラム編成の見直しも検討したい。[日本文学文化学科]</p>
<p>法律学科の専任・特任教員は昨年度に引き続き、Zoom を活用し授業を実施した（講義科目・ゼミナールとも）。もっぱら双方向授業であるが、講義の質は落ちなかった（対面と変わらなかったとの受講者からのコメントもある）。[法律学科]</p>	<p><b>社会で生じることがらに関心を向けさせ、授業で学習したことごとりと結びつけることができるように、授業で指導することが肝要である</b>。[法律学科]</p>
<p>自然環境・社会環境の持続性維持・発展を追求できるように学生に関連テーマに基づくデータサイエンス授業を実施している。[データサイエンス学科]</p>	<p>教員が自ら自然環境・社会環境の持続・発展を追求する研究・教育に取り組めるように、アジア AI 研究所の年次<b>国際シンポジウムへの学科教員の出席を必須化</b>した点。[データサイエンス学科]</p>
<p>個人の関心にあったテーマを選択できるプロジェクト科目は評価が高い。[環境システム学科]</p>	<p>評価が高かった教員から授業方法等を学ぶ学科 FD を予定している。[環境システム学科]</p>
<p>初学者の興味を高めるため、できる限り繰り返し学修できる環境を整え、オンデマンドでの授業形態等を準備した。[建築デザイン学科]</p>	<p>課題解決ができない場合、粘り強く状況に向き合う力を養う。<b>問題解決のために、事象を細分化する小目標を設定する</b>。[建築デザイン学科]</p>

## ③DP3&lt;思考・判断&gt;の達成状況に関して

現状分析	具体的改善案
引き続き、オンライン授業下においても、一部授業では各学生の課題に細かくフィードバックし、論理的・理論的な分析力を向上させようという取り組みが行われた。[経営学科]	経営学科では、3年次開講の履修者40名以下の科目にて、DP3の到達目標の設定がなされていることが多いため、令和5年度以降はこれらの科目を優先的に対面授業化するなどの工夫を行っていきたい。教務課をはじめとした全学的なサポートにも期待している。[経営学科]
答えの無い問いにおいて、学生自身が問いを立て、考えることにより理解を深める結果と分析できる。課題は、論理的な思考を向上させる機会が不足している点。クリエイティブな思考とのアンバランスな状況。[建築デザイン学科]	自分の考えを深くするだけでなく、他者の意見や関心を高める指導に努める。[建築デザイン学科]
教育学科の授業の多くはアクティブ・ラーニング的な「深い学び」によって展開されている。学科FDなどを通じて、各授業の「深い学び」実現のための手法を共有していきたい。[教育学科]	学科FDで紹介された優れた実践：「理科」では、学校教育の理科授業で行われる実験等を扱い、自然の不思議さや巧みさ、理科の面白さを体得することを主眼とし、 <b>コンテンツではなくコンピテンシーベースの授業を意識</b> して、実験の予想や仮説と結果との一致不一致を考えさせるなどする授業が展開されている。このように、 <b>学修者が思考するための課題や問い、授業展開</b> について、各担当授業に活かしていくことが期待される。[教育学科]

## ④DP4&lt;実践的スキル・表現&gt;の達成状況に関して

現状分析	具体的改善案
創作や実習に関する科目の履修学生の意欲的な姿勢が窺える。なお、コロナ禍を契機に授業運営やゼミ発表等ではPowerPoint等のプレゼンテーション関連ツール、ジャパナビレッジ等のオンラインデータベース、Google Classroom等のオンライン学修ツールが積極的に活用されるようになった。[日本文学文化学科]	6クラス開講している「入門ゼミA」は総じてDP4への回答平均値が低く、入学直後における大学での学修についての準備や技術の伝授等が十分に機能していない可能性がある。令和4年度は、アドバイザー担当のより少人数でのクラス別授業の回数を増やし、アカデミックスキルズ等の教育についても補強する。[日本文学文化学科]
特に1年生に関して、基礎的なICTスキルが不足しているため、自分の議論を表現できない学生が多く存在している。[経営学科]	1年生の選択科目である《ICTと研究調査》の開講学期を令和4年度より変更（後期→前期）する。この科目を通じて、 <b>いち早く新入生が基礎的なICTスキル・表現スキルを身に付けられるようにしていきたい</b> 。[経営学科]
実践的なスキルを学修しながら得ることができた。[アントレプレナーシップ学科]	<b>全ての科目でPBL、ディスカッション、グループワーク</b> を行っている。[アントレプレナーシップ学科]
「学んだことを実社会に結びつけることができたか」の問いも、学年別の結果が大事。3・4年生に聞いた結果を見たい。[数理工学科]	大学院生主体の自主ゼミを、院生に謝金を出してでもやったらどうか。上の層が伸びつつ、下の層も伸びるという流れが理想的である。[数理工学科]
保育・幼児教育において発揮できる力をすべての科目において、高い割合で養成できていることをひとつの成果とし、今後も学科全体でさらなる向上を目指したい。[幼児教育学科]	引き続き <b>理論と実践を結びつけながら授業設計</b> をするとともに、現代的な課題や最新の情報も取り入れた授業内容を検討していきたい。また、14回の授業の中で、基礎と応用を行きつ戻りつしながら、次第に目標に到達できる仕組みをつくり、履修者が主体的に考え取り組める授業を展開していきたい。[幼児教育学科]
プレゼンテーションをさせることによって、スキル向上を図れるが、グループ学習での成果を発表させる場合には、各人がどの程度発表に関わっているかが図りにくい。[教養教育]	グループ学習やプレゼンテーションの機会を多く取り入れ、それに対する適切なフィードバックを図ることが必要である。また、 <b>発表の内容についての自己評価と他者評価を繰り返す</b> ことで、より高いレベルを促すことが重要である。[教養教育]



## 令和3年度 学科 FD 実施報告

文学部 日本文学文化学科	
日時	令和3年6月28日(月) 17:00～19:00
講師	文学部 土屋 忍 学部長・教授 日本文学文化学科 岩城 賢太郎 学科長・准教授
テーマ	令和3年度文学部日本文学文化学科・文学研究科 学科FD委員会・研究科FD委員会・自己点検・評価小委員会及び中長期計画について
目的	文学部・文学研究科の理念と目的、内部質保証、出口保証、教育の質保証、今後の課題についての説明と確認、学科教員間の自由討議。文学部中長期計画の土岐善磨作新才能「親鸞」復曲上演プロジェクトについての概説と協力依頼、情報交換。
日時	令和3年9月21日(火) 18:00～20:00
講師	日本文学文化学科後期授業担当非常勤講師
テーマ	令和3年度前期授業の振り返りと、後期授業の授業運営について
目的	学科専任教員より前期授業の概況や学生の様子についての報告を行い、非常勤講師の先生方からも前期授業運営上の概況や成果、問題点等を聴取し、学科の後期の授業運営をより効果的に実施する知見を得る。
日時	令和3年12月20日(月) 17:00～18:10
講師	日本文学文化学科専任教員
テーマ	令和3年度授業評価アンケート結果を基にした学科FD
目的	学科教員担当の令和3年度前期授業科目に関する評価アンケートの結果の確認と総括及び令和3年度後期授業の概況についての報告と情報交換を学科専任教員全員で行う。
日時	令和4年2月24日(木) 15:00～16:30
講師	日本文学文化学科 寺島 恒世 特任教授
テーマ	これからの日本古典文学研究—歌謡研究を例に—
目的	令和3年度末で定年退職を迎えられる寺島特任教授より、40年以上に亘る教育・研究機関での教育・研究・事業運営の実績を踏まえた上で、本学での5年間の教育・研究を総括していただき、今後の日本文学文化学科の教育、研究の両面における指針、助言を得る。
グローバル学部 グローバルコミュニケーション学科	
日時	令和3年12月21日(火)
講師	グローバルコミュニケーション学科 古家 聡 学科長・教授
テーマ	授業評価に関する学科FD
目的	学生からの授業評価について、今後の学科の運営と方針を検討する。
日時	令和4年3月9日(水) 10:00～12:00
講師	グローバルコミュニケーション学科 櫻井 千佳子 教授
テーマ	EQ/ISQの授業改善に関するFD
目的	令和4年度EQ/ISQの担当教員と同科目の基本方針を共有し、質疑やディスカッションを通じて、科目の内容のさらなる充実を図る。
日時	令和4年3月22日(火) 10:00～12:00
講師	グローバルコミュニケーション学科 Anne C. Ihata 教授 グローバルコミュニケーション学科 Albert R.Zhou 教授
テーマ	GC/JCのPC/ISC科目学科FD
目的	カリキュラム及び授業運営に関する諸問題の説明と議論を行い、特にスピーキング/リスニングやライティングの強化に関する議論の推進を目的とする。

グローバル学部 日本語コミュニケーション学科	
日時	令和3年11月30日(火) 18:40～19:10
講師	—
テーマ	令和3年度授業評価アンケートを基にした学科FD
目的	①科目のアセスメント 科目ごとの学修成果の達成状況を確認する。 —課題を可視化し、改善策を学科内で共有する。 —授業への主体的参加をより高めるための課題、ノウハウ、スキル共有の場とする。 —授業運営におけるGP(Good Practice)を見つけ出し、教育の質向上を図る。 ②学科カリキュラムのアセスメント 学科の教育課程全体を通じた学修成果の達成状況を確認する。 —科目の体系性・適応度を検証し、教育改善につなげる。 —カリキュラム再編成に向けた点検を行う。
日時	令和4年3月14日(月) 10:00～11:30
講師	—
テーマ	令和4年度日本語コミュニケーション学科授業科目担当者顔合わせFD
目的	令和4年度大学の授業方針を確認し、授業科目担当者間で打合せを行う。
グローバル学部 グローバルビジネス学科	
日時	令和3年12月17日(金) 10:00～12:10
講師	グローバルビジネス学科 黒木 達雄 学科長・教授
テーマ	学生FD
目的	学科上級生達から学科カリキュラムに関する意見・提言を聞き、学科カリキュラムの更なる改善に役立てる。
日時	令和4年1月18日(火) 17:30～18:30
講師	グローバルビジネス学科 黒木 達雄 学科長・教授
テーマ	令和3年度2学期授業アンケートの振り返り
目的	授業アンケート結果から学生達の理解度・満足度を確認し、更なる改善点を探る。
日時	令和4年3月8日(火) 14:40～16:00
講師	日本国際化推進協会(JAPI)スタッフ 就職・キャリア支援課職員
テーマ	日本の就職活動について
目的	外国人教員の日本独特の就職活動に関する理解度を高める。
法学部 法律学科	
日時	令和3年5月11日(火) 10:40～12:20
講師	武蔵野大学 西本 照真 学長 法律学科 池田 眞朗 教授 法律学科 佐佐 紀仁 准教授 武蔵野大学 本田 圭 非常勤講師 土井 隆司 前グローバル学部教授 (しあわせ研究所非常勤研究員)
テーマ	SDGsとESGを学ぶ
目的	武蔵野大学における(あるいは全世界的に)重要なテーマであるSDGsとESGについて、学科教員の認識を深めることを目的とする。
日時	令和3年6月16日(水) 10:40～12:20
講師	ダイハツ工業株式会社コーポレート統括本部新規事業戦略室 室長 新田 隆次 氏
テーマ	自動車メーカーの地域貢献—ダイハツ工業の場合

目的	武蔵野大学における(あるいは全世界的に)重要なテーマであるSDGs、ESGについて、学科教員の認識を深めることを目的とする。「SDGsとESGを学ぶ」の続編としての位置づけで、ダイハツ工業様による自動車メーカーの地域貢献に関するご講演をSDGsの具体例として伺い、さらなる知見を得る。
日時	令和3年11月18日(木) 18:40～19:00
講師	—
テーマ	授業評価アンケート結果を基にした学科FD
目的	①科目のアセスメント ②学科カリキュラムのアセスメントの検証
法学部 政治学科	
日時	令和3年10月4日(月) 令和3年11月2日(火) 令和4年3月1日(火)
講師	学科会に参加された教員
テーマ	カリキュラム改善を中心に政治学科の教員構成を考察する
目的	令和3年～令和4年度の教員人事をめぐる学科のカリキュラム改善と教員構成を考察する。
経済学部 経済学科	
日時	令和3年8月5日(木) 17:00～17:30
講師	—
テーマ	前期授業の振り返りと後期に向けて
目的	前期授業の実施方法や内容について振り返りを行い、後期授業の進め方を考える機会とする。
日時	令和3年8月5日(木) 17:30～18:15
講師	—
テーマ	数学の学修について
目的	数学に関する入学前教育と入学時の数学能力判定試験の結果について情報共有を行う。
日時	令和3年10月14日(木) 18:45～19:45
講師	—
テーマ	令和4年度カリキュラムについて
目的	今後の学科カリキュラムの再検討を行う機会とする。
日時	令和3年10月27日(水) 11:00～12:30
講師	大東文化大学 助教 那須田 晃子 氏
テーマ	令和4年度カリキュラムについて
目的	学科概要の理解とカリキュラムの確認を行う。
日時	令和3年12月2日(木) 13:30～14:30
講師	経済学科 江頭 隆治 客員教授
テーマ	令和3年度担当科目の振り返りと令和4年度カリキュラムについて
目的	学部学科DP/CPを再確認し、教育の質向上を専任・非常勤間で考える機会とする。
日時	令和3年12月16日(木) 18:00～18:30
講師	—
テーマ	令和3年度前期授業評価アンケート総括①
目的	令和3年度前期授業評価アンケート結果の確認を行う。
日時	令和4年1月13日(木) 17:40～18:15
講師	—
テーマ	令和3年度前期授業評価アンケート総括②
目的	令和3年度前期授業評価アンケート結果の確認を行い、FD実施報告書作成に向けて議論を行う。

日時	令和4年1月20日(木) 18:15～19:10
講師	—
テーマ	卒論・ゼミ論について
目的	令和3年度の卒論・ゼミ論の振り返りと令和5年度からの進め方について議論を行う。
日時	令和4年2月17日(木) 18:45～19:26
講師	—
テーマ	後期授業の振り返りと次年度に向けて
目的	後期授業の実施方法や内容について振り返りを行い、次年度授業の進め方を考える機会とする。
<b>経営学部 経営学科</b>	
日時	令和3年4月14日(水) 17:00～18:00
講師	経営学科教員6名
テーマ	新年度開始後の履修登録、未入国学生への対応、オンライン授業への対応について
目的	コロナ禍が続く中で新年度の開始にあたり、学科として対応すべき事案について確認と議論を行う。
日時	令和3年5月12日(水) 17:00～18:00
講師	経営学科教員5名
テーマ	ブランドビジョン教務関係項目の達成度確認と次年度の課題について
目的	「ブランドビジョン2020」の目標達成度を確認し、「ブランドビジョン2021」の目標・取り組み内容や今後の学科の教務課題について考える。
日時	令和3年6月9日(水) 17:00～18:00
講師	経営学科教員4名
テーマ	令和4年度時間割編成について
目的	次年度の学科時間割編成に向けて、既存のカリキュラムの問題点を洗い出し改善策を考える。
日時	令和3年7月1日(木) 13:30～14:30
講師	経営学科教員5名
テーマ	経営学科における「響創的学び」の前期振り返りについて
目的	学科における「響創的学び」の実践状況(前期分)について確認し、今後の推進を考える。
日時	令和3年7月14日(水) 17:00～18:00
講師	経営学科教員4名
テーマ	BYOD環境を活かした教育実践案について
目的	BYOD環境を活かした教育実践について、経営学科案とその実行プロセスについて考える。
日時	令和3年9月1日(水) 14:00～15:00
講師	経営学科教員5名
テーマ	学科広報向け映像資料作成について
目的	学科広報のための映像資料作成について議論する。
日時	令和3年10月3日(日) 18:00～19:00
講師	経営学科教員7名
テーマ	令和4年度事業計画について
目的	経営学科の「令和4年度事業計画」について議論する。
日時	令和3年11月23日(火) 9:30～10:30
講師	経営学科教員6名
テーマ	令和5年度に向けた学則変更案について
目的	令和5年度に予定している学則変更について、その基本方針や作業工程を議論する。

日時	令和3年12月8日(水) 17:00～17:30
講師	経営学科教員5名
テーマ	令和4年度初頭ガイダンスおよびシラバス作成について
目的	令和4年度の初頭ガイダンスおよびシラバス作成について議論する。
日時	令和4年1月12日(水) 17:30～18:30
講師	経営学科教員7名
テーマ	令和5年度に向けた学則変更案について
目的	令和5年度に予定している学則変更について議論する。
<b>経営学部 会計ガバナンス学科</b>	
日時	令和4年2月16日(水) 18:30～19:30
講師	—
テーマ	令和3年度オンライン授業の工夫について
目的	令和4年度以降も恒常的にオンライン授業が開催されることを踏まえて、令和2年度から令和3年度のオンライン授業の改善点、工夫などを学科教員が披露しあい、情報の共有を行った。
<b>アントレプレナーシップ学部 アントレプレナーシップ学科</b>	
日時	令和3年9月22日(水) 13:00～15:00
講師	アントレプレナーシップ学科 荒木 博行 非常勤講師 (ファシリテーション)
テーマ	アントレプレナーシップ学部教育デザインにおける留意すべき点と今後の指針について
目的	アントレプレナーシップ学部の Education Policy, EMC Way を確立していくため、教員間での議論をし、今後の指針についてを言語化する。
日時	令和4年3月19日(土)～3月20日(日)
講師	アントレプレナーシップ学科教員
テーマ	アントレプレナーシップ学部1年次カリキュラムの振り返り、2年次カリキュラムについてのディスカッション
目的	学部開設後1年を経て、実施したカリキュラム内容について各教員間で意見交換を行い、次年度への準備に備える。
<b>データサイエンス学部 データサイエンス学科</b>	
日時	令和3年11月17日(水) 11:30～19:00
講師	タイ・タマサート大学 (Prof. Thira Jearsiripon, Prof. Siriwan Suebnukarnら)
テーマ	The 3rd International Symposium on Asia AI
目的	AI for Life during & after COVID-19として、タイと日本の AI 研究者らによる研究内容及び共同研究に向けたディスカッションをする。
日時	令和3年11月15日(月)～11月20日(土)
講師	タイ・タマサート大学、武蔵野大学アジア AI 研究所
テーマ	The 3rd AI For Business and Industry Training Program, AI&5D Consortium Summer School
目的	タイと日本の AI 研究者、ビジネスマンからビジネス、産業分野への AI の応用、その基礎技術について実習を伴いながらトレーニングする。
<b>人間科学部 人間科学科</b>	
日時	令和3年9月3日(金) 10:00～12:00
講師	人間科学科 五島 直樹 教授
テーマ	網羅的なヒトタンパク質の人工合成とその利用—新しいヒトタンパク質研究—

目的	心理学、社会学、生命科学、宗教・哲学など多様な専門分野を有する人間科学科の学際志向を推進するため、学科教員の研究テーマに関する講演を聴講し、各教員の専門分野との関連を考察する。
日時	令和3年9月24日(金) 18:00～18:30
講師	人間科学部 辻 恵介 学部長・教授 人間科学科 小西 啓史 教授
テーマ	人間科学科の経緯と今後の展望
目的	大学改革の流れを背景に、本学科も人間関係学科としての設置以降変化を重ねてきた。この間、新任の教員も多く迎えており、改めて本学科の経緯を共有し、今後の在り方を検討する。
日時	令和3年10月22日(金) 17:00～17:30
講師	株式会社マイナビ (学科担当教員: 人間科学科 矢澤 美香子 准教授)
テーマ	MATCHplus の結果と進路指導について
目的	令和3年度前期に実施した MATCHplus の結果を踏まえて、学科学生の傾向及び特性等に基づく学科の進路指導、キャリア支援の充実強化を図る。
日時	令和4年2月18日(金) 18:30～20:00
講師	人間科学科 一ノ瀬 正樹 教授
テーマ	「死刑論」再訪
目的	心理学、社会学、生命科学、宗教・哲学など多様な専門分野を有する人間科学科の学際志向を推進するため、学科教員の研究テーマに関する講演を聴講し、各教員の専門分野との関連を考察する。
<b>人間科学部 社会福祉学科</b>	
日時	令和3年5月14日(金)
講師	社会福祉学科 木下 大生 教授 社会福祉学科 熊田 博喜 教授
テーマ	木下教授: 罪を犯した知的障害者に対する支援政策 熊田教授: マイ生活課題
目的	他の教員が担当する授業に参加し、授業実施方法や準備等について学び合う。
日時	令和3年7月2日(金)
講師	社会福祉学科 大崎 広行 教授 社会福祉学科 小高 真美 准教授
テーマ	大崎教授: ソーシャルワークの理念 小高准教授: 精神疾患のある人に対するステイグマ
目的	他の教員が担当する授業に参加し、授業実施方法や準備等について学び合う。
日時	令和3年11月12日(金)
講師	社会福祉学科 櫻井 真一 講師 社会福祉学科 永野 咲 講師
テーマ	櫻井講師: コロナ禍における貧困・低所得者を対象とした就労支援の意義 永野講師: 虐待死の事件検証から
目的	他の教員が担当する授業に参加し、授業実施方法や準備等について学び合う。
日時	令和4年1月21日(金)
講師	社会福祉学科 渡邊 浩文 教授 社会福祉学科 野口 友紀子 教授
テーマ	渡邊教授: 今後の高齢化・人口減少社会における高齢者福祉の課題 野口教授: 社会福祉の理念の変遷



目的	他の教員が担当する授業に参加し、授業実施方法や準備等について学び合う。
<b>工学部 環境システム学科</b>	
日時	令和3年12月13日(月) 17:00～18:30
講師	—
テーマ	授業評価アンケートの結果を基にした授業改善
目的	授業評価アンケートの結果から①科目ごとの学修成果の達成状況を確認し、②学科カリキュラムのアセスメントを実施する。
日時	令和4年2月7日(月) 13:00～14:30
講師	アクアスフィア・水教育研究所代表、本学客員教授 橋本 淳司氏
テーマ	双方向型授業やPBLの手法について
目的	特色あるPBL型授業を中心としたカリキュラム開発のため、橋本先生が実践するPBLの事例や手法について学修する。
日時	令和4年2月17日(木) 15:00～16:30
講師	ビジネス・ブレークスルー大学教授 斉藤 徹氏
テーマ	チームのつくり方
目的	自ら学習し、共感し、自走するチームを作るために必要な「心理的に安全な場の作り方」を学ぶ。
<b>工学部 数理工学科</b>	
日時	令和3年6月29日(火) 17:05～18:55
講師	—
テーマ	配慮が必要な学生への対応について
目的	聴覚障害を持つ学生に対して、対面またはオンラインでの授業でどのように対応できるかの意見交換、情報共有を行う。
日時	令和3年11月22日(月) 19:00～19:40
講師	—
テーマ	授業評価アンケートを基にした学科FD
目的	令和3年度1・2学期授業評価アンケート結果を基にして、結果の解析、実際の授業の中で感じていることについての意見交換を行う。
日時	令和4年2月8日(火) 18:30～19:30
講師	—
テーマ	研究室の運営について
目的	感染拡大下におけるオンラインでの研究室運営に関する情報を共有し、次年度からの研究室運営に向けた意見交換を行う。
<b>工学部 建築デザイン学科</b>	
日時	令和3年10月5日(火) 13:10～15:00
講師	建築デザイン学科教員
テーマ	SDGs 実行目標について
目的	建築デザイン学科におけるSDGsへの取り組みと振り返りについて。
日時	令和3年10月26日(火) 13:10～15:00
講師	建築デザイン学科教員
テーマ	オンライン授業対応等で利用されているツールの種類やその使用感について
目的	各教員がそれぞれの授業などで活用しているオンライン授業ツールの情報共有を行う。
日時	令和4年1月18日(火) 13:10～15:00
講師	建築デザイン学科教員
テーマ	令和3年度前期授業評価アンケート結果
目的	建築デザイン専攻におけるPDCAサイクルの確立に向けた授業改善。

<b>教育学部 教育学科</b>	
日時	令和3年12月2日(木) 14:50～16:50
講師	—
テーマ	対面授業をベースとした授業におけるICT技術の活用
目的	授業を受けている立場の学生と議論することを通じて、今後、大学の対面授業においてICT技術をどのように活用した授業が考えられるかについての知見を得る。
日時	令和4年1月13日(木) 16:50～17:50
講師	—
テーマ	授業評価アンケートを基にした授業改善学科FD
目的	学生からの授業評価が高い科目について、その担当者から授業内容等について紹介いただくことを通じて、そのノウハウを各教員が活かした授業を展開できるようにする。
日時	令和4年3月24日(木) 10:00～17:00
講師	—
テーマ	京都研修
目的	西本願寺や同じ宗門大学である龍谷大学を見学することで、浄土真宗の教えや宗門大学としてのあり方に関する学びを深める。また、各参加教員が、各々の専門分野に近接した領域に関わる見学等を行うことで、担当科目の授業へと活かす。
<b>教育学部 幼児教育学科</b>	
日時	令和4年1月13日(木) 18:00～20:00
講師	幼児教育学科専任教員
テーマ	授業評価アンケートを基にした検討
目的	前期授業評価アンケートの結果を受け、授業外の学修時間と授業の理解度、さらに学科DPとの関係性と考察した。
日時	令和4年3月16日(水) 14:00～17:00
講師	—
テーマ	優れた芸術作品を鑑賞することによって、芸術的な感性について考察する。
目的	優れた芸術作品(オペラ)を鑑賞することを通じて教員にとって必要な批評と鑑識眼を身に付ける。
<b>薬学部 薬学科</b>	
日時	令和3年12月26日(日) 10:00～11:45
講師	薬学科 学生3年生(5名) 薬学科 廣谷 功 学科長・教授 薬学科 赤石 樹泰 講師
テーマ	テーマ:「オンライン授業って・・・」 トークテーマ①: オンライン授業になって「良かったこと」と「悪かったこと」。「ライブ型」または「オンデマンド型」? トークテーマ②: こう変えたらもっと良くなるオンライン講義。 トークテーマ③: 学生の目から見た武蔵野大学の良いところ、改善して欲しいところ。
目的	教員と学生が同じテーマについて議論することによって、より充実した講義を行えるような情報を入手する。
日時	令和4年1月11日(火) 16:30～16:50
講師	薬学科 廣谷 功 学科長・教授
テーマ	令和3年度前期の授業評価の分析と改善
目的	前期の授業評価アンケート結果の紹介を行う。
日時	令和4年1月11日(火) 16:50～17:20
講師	薬学科 高橋 徹行 講師
テーマ	令和3年度学修支援プログラムの報告と開始時からの追跡調査

目的	令和3年度に実施した1年生対象の学修支援プログラムの報告を行う。
日時	令和4年1月11日(火) 17:20～17:40
講師	薬学科 赤石 樹泰 講師
テーマ	令和3年度2・3年生対象の学修支援プログラムの報告
目的	令和3年度に実施した2・3年生対象の学修支援プログラムの報告を行う。
日時	令和4年2月17日(木) 10:00～11:30
講師	各研究室研究者養成コース5年生
テーマ	研究者養成コース5年生による研究成果中間発表会(ポスター発表)
目的	【薬科学研究科と共同開催】研究者養成コース5年生による研究成果の中間発表会を実施する。
日時	令和4年2月17日(木) 13:10～15:30
講師	各研究室および二センターの代表教員
テーマ	各研究室および二センターの代表教員より研究成果の概要説明(プリーフィング)と成果発表会
目的	【薬科学研究科と共同開催】各研究室および二センターの代表教員により研究成果の概要説明と成果発表会を実施し、教員・学生との質疑応答を行う。
日時	令和4年2月17日(木) 16:40～16:50
講師	薬学部 堅田 利明 学部長・教授
テーマ	ブランドビジョン目標「薬学系統合企画」中間報告と展望
目的	【薬科学研究科と共同開催】薬学部長・薬学科長によるブランドビジョン目標の中間報告と展望
日時	令和4年2月17日(木) 15:45～17:55
講師	①慶應義塾大学特任教授・本学客員教授 谷川原 祐介氏 ②薬学部 堅田 利明 学部長・教授
テーマ	①「個別化授業を支える薬学サイエンス」 ②「大学人として過ごした半世 私の履歴書」
目的	【薬科学研究科と共同開催】慶應義塾大学特任教授・本学客員教授である谷川原先生の発表と堅田先生の最終講義を実施する。
<b>看護学部 看護学科</b>	
日時	令和3年7月26日(月) 16:00～17:30
講師	東京医科大学医学部看護学科 基礎看護学領域 教授 東京医科大学病院シミュレーションセンター センター長 阿部 幸恵氏
テーマ	【FD講演会】シミュレーション教育を実践するための基本的な考え方を学ぶ 第1部 シミュレーション教育のシナリオ(授業設計案)作成
目的	令和4年度の新カリキュラムからシミュレーション教育科目が増加する。また、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、臨床実習ができない、期間短縮などの影響があり、学内におけるシミュレーション教育はより重要となっている。そこでシミュレーション教育を実践するための基本的な考え方を学ぶため、第1部ではシミュレーション教育の授業設計の基本的な考え方について理解を深める。
日時	令和3年8月30日(月) 16:00～17:30
講師	東京医科大学医学部看護学科 基礎看護学領域 教授 東京医科大学病院シミュレーションセンター センター長 阿部 幸恵氏
テーマ	【FD講演会】シミュレーション教育を実践するための基本的な考え方を学ぶ 第2部 シナリオ(授業計画案)のブラッシュアップ



目的	第1部のシミュレーション教育におけるシナリオ(授業設計案)の作成の講演を踏まえ、第2部ではシミュレーション教育を臨床に即した状況とし、効果的に学修できるよう、実際の授業のシナリオを題材に、講師から改善点などについて指導を受け、シナリオのブラッシュアップを図る。
日時	令和3年12月22日(水)13:00~14:30
講師	—
テーマ	【FD懇話会】令和3年度授業評価アンケート結果の検討
目的	令和3年度の授業評価アンケートの集計結果をもとに、学修成果の達成状況を共有し、オンライン学習が増加している状況の中、主体的学修や積み重ね学修、看護技術力やコミュニケーション能力を高めるための工夫について考える。
日時	令和4年1月24日(月)16:00~17:30
講師	聖路加国際大学大学院看護学研究科 国際看護学教授 聖路加国際大学 WHO コラボレーティングセンター部長 大田 えりか氏
テーマ	ニューノーマル時代に看護学教育者・看護専門職者に求められる力
目的	新型コロナウイルス感染拡大により、教育・研究の方法には大きな変更が求められている。新しい生活様式や働き方が広まっていく中、看護学教育・研究者として求められる能力について学ぶ。
<b>教養教育部会</b>	
日時	令和3年4月6日(火)11:00~12:00 令和3年11月5日(金)11:00~12:00
講師	—
テーマ	第1回全学教職課程懇話会 第2回全学教職課程懇話会
目的	全学教職課程固有の課題について、関係者が情報共有や意見交換を行い、全学教職課程の充実を図る。
日時	令和3年4月8日(木)10:00~12:00 令和3年9月15日(水)10:00~11:30 令和4年2月17日(木)14:00~16:00
講師	教養教育部会 平田 秀 講師
テーマ	日本語リテラシー FD 研修会
目的	先生方との顔合わせと授業の振り返り・情報交換を行う。
日時	令和3年6月16日(水)16:20~16:40
講師	教養教育部会 小川 桂一郎 部長・教授
テーマ	固体分子の動的挙動-結晶中の有機分子の動きを捉える-
目的	研究発表
日時	令和3年7月21日(水)16:20~16:40
講師	教養教育部会 李 賢峻 教授
テーマ	朝鮮の舞姫崔承喜(チュ・スンヒ)-戦前における植民地文化表象をめぐって-
目的	研究発表
日時	令和3年7月30日(金)15:00~17:00 令和4年3月4日(金)14:00~15:30
講師	教養教育部会 李 賢峻 教授
テーマ	韓国語 FD 研修会
目的	先生方との顔合わせと授業の振り返り・情報交換を行う。
日時	令和3年8月5日(木)15:00~17:00 令和3年11月22日(月)9:30~10:30 令和3年11月29日(月)9:30~10:30 令和4年2月2日(水)11:00~11:40

講師	教養教育部会 林 浩一 教授
テーマ	情報技法基礎 FD 研修会
目的	・授業改善点の共有 ・来年度授業について
日時	令和3年8月6日(金)16:00~17:00 令和4年2月21日(月)10:00~11:30
講師	教養教育部会 福土 輝美 教授
テーマ	司書・司書教諭 FD 研修会
目的	「司書」・「司書教諭」科目をご担当いただく先生との授業に関する情報交換を行う。
日時	令和3年9月13日(月)9:00~12:10 令和4年3月5日(土)9:00~12:10
講師	教養教育部会 菅原 克也 教授
テーマ	仏西独語 FD 研修会
目的	・カリキュラム改革のあらまし ・質の高い授業の展開を実現するための工夫
日時	令和3年9月14日(火)10:00~11:30 令和4年2月10日(木)13:00~14:50
講師	教養教育部会 平田 秀 講師
テーマ	日本語 FD 研修会
目的	授業に関する情報交換を行う。
日時	令和3年9月17日(金)10:40~12:00
講師	教養教育部会 小川 桂一郎 部長・教授 人間科学科 一ノ瀬 正樹 教授
テーマ	「SDGs 基礎 / 発展」の授業実践について
目的	・質の高い授業の展開を実現するための工夫 ・実践例の紹介
日時	令和3年9月21日(火)10:00~15:00 令和4年2月28日(月)10:00~15:00
講師	教養教育部会 菅原 克也 教授
テーマ	英語 FD 研修会
目的	・カリキュラム改革のあらまし ・質の高い授業の展開を実現するための工夫
日時	令和3年9月22日(水)16:20~16:40
講師	教養教育部会 新作 慶明 准教授
テーマ	「仏教学」と空
目的	研究発表
日時	令和3年10月20日(水)16:20~16:40
講師	教養教育部会 大崎 理乃 講師
テーマ	コンピュータによる「つくる」ことの支援
目的	研究発表
日時	令和3年11月10日(水)16:20~16:40
講師	教養教育部会 間中 和歌江 准教授
テーマ	リメディアル英語クラスにおけるプレアクティブラーニングの実践
目的	研究発表
日時	令和3年12月15日(水)16:20~16:40
講師	教養教育部会 藤田 祐介 教授
テーマ	「教育の政治的中立」の政治過程
目的	研究発表
日時	令和3年12月15日(水)16:20~16:40
講師	教養教育部会 貝塚 茂樹 教授
テーマ	授業評価アンケートより教養教育科目について考える
目的	授業評価アンケートから教養教育科目の今後を検討する。

日時	令和4年1月19日(水)16:20~16:40
講師	教養教育部会 長尾 重輝 講師
テーマ	唯識思想 仏教による認識作用の分析
目的	研究発表
日時	令和4年2月2日(水)10:00~12:00 令和4年2月18日(金)13:00~14:30 令和4年2月22日(火)13:00~18:30
講師	教養教育部会 渡邊 紀文 准教授
テーマ	プログラミング基礎ほか情報科目 FD 研修会
目的	・授業改善点の共有 ・来年度授業について
日時	令和4年2月21日(月)16:50~18:30
講師	教養教育部会 中村 太蔵留 准教授
テーマ	情報必修科目 FD 研修会
目的	・授業改善点の共有 ・来年度授業について
日時	令和4年3月2日(水)10:00~12:00
講師	教養教育部会 遠藤 祐介 教授
テーマ	中国語 FD 研修会
目的	・授業改善点の共有 ・来年度授業について
<b>通信教育部</b>	
日時	令和3年6月14日(月)16:30~18:00
講師	通信教育部人間科学部 川島 哲 助教
テーマ	FDの展望
目的	・通信教育部のファカルティディベロップメント(FD)について確認する。 ・通信教育部の学修準備(スタディガイド作成)や学習指導(新入生懇話会や学習相談会等)のマニュアル作成の意義について確認する。 ・今後の授業改善に向けたFDの方向性を共有する。
日時	令和3年9月17日(金)10:40~12:00
講師	【話題提供】SIC(スマート・インテリジェント・キャンパス)プロジェクトチーム
テーマ	SIC 通信教育部タスクフォース
目的	・SICプロジェクトの方向性を共有する。 ・通信教育部およびWBTの課題、実現希望・拡張希望の機能等について共有する。
日時	令和3年10月11日(月)16:45~18:00
講師	【話題提供】通信教育部人間科学部 川島 哲 助教 通信教育部人間社会研究科 野口 善子 准教授
テーマ	スタディガイド(+エクササイズ)作成時のヒント集作成に向けて(1)
目的	各専攻・コース(心理学、仏教学、社会福祉、看護)科目のスタディガイドおよびエクササイズ問題作成時のヒント集作成にむけてそれぞれの工夫等を共有する。
日時	令和3年11月8日(月)16:30~18:00
講師	【話題提供】通信教育部人間科学部 前廣 美保 准教授 通信教育部人間科学部 川島 哲 助教 通信教育部人間社会研究科 野口 善子 准教授
テーマ	スタディガイド(+エクササイズ)作成時のヒント集作成に向けて(2)
目的	各専攻・コース(心理学、仏教学、社会福祉、看護)科目のスタディガイドおよびエクササイズ問題作成時のヒント集作成にむけてそれぞれの工夫等を共有する。

# 令和3年度 研究科 FD 実施報告

文学研究科	
日時	令和3年6月28日(月) 17:00~19:00
講師	文学研究科 土屋 忍 研究科長・教授 文学研究科 岩城 賢太郎 准教授
テーマ	教育の質保証・出口保証・中長期計画、「親鸞プロジェクト」
目的	文学部55年と文学研究科の伝統(特に仏教と韻文)を振り返り、将来構想を確認し、今後の教育研究活動を検討する。事務職員は、教育研究活動を把握し事務を担当することを目指す。教員は、研究時間を確保することを目指す。

言語文化研究科	
日時	令和3年9月18日(土) 18:00~19:30
講師	ビジネス日本語コース専任教員
テーマ	ビジネス日本語コース令和3年度後期授業の対応について(未入国者の現状と対応策)
目的	ビジネス日本語コースの秋入学学生は新入生も8名中2名しか入国できていないことから、これまでの知見を共有し、ハイブリッドが可能かどうか、オンライン対応での学習効果などについて検討する。
日時	令和3年9月21日(火) 13:10~14:50
講師	言語文化研究科 櫻 殿武 研究科長・教授 言語文化研究科 島田 徳子 教授(科目コーディネーター)
テーマ	言語文化コース必修科目「言語文化研究概論」に関する検討について
目的	授業内容、成績評価の方法などにおける問題点と昨年度の結果をふまえ、各自担当授業で独自に工夫された点を全体で共有しながら、科目の質の向上を図る。
日時	令和4年1月23日(日) 14:00~16:30
講師	ビジネス日本語コース専任教員
テーマ	ビジネス日本語コース令和4年度シラバスの校正、内容について
目的	令和5年度の学則変更を見据え、授業内容の見直しとシラバス内容の検討を行う。

法学研究科	
日時	令和3年6月10日(木)
講師	全体: 法学研究科 池田 眞朗 研究科長・教授 合同授業講演者: 法学研究科 佐保 紀仁 准教授
テーマ	法学研究科の研究教育イノベーション
目的	以下の6項目について、法学研究科の研究教育の総合的なイノベーションの実現に向けて全員で検討する。 1. 法学研究所主催令和3年度法律学科・法学研究科合同SDGs関係特別授業「SDGsとESGを学ぶ」(令和3年5月11日、参加者200名)の振り返り 【この合同授業からの発展—Linking & Thinking】 2. 法学研究科令和3年度の重点研究テーマの選定 3. 法学研究科SDGs宣言の発出(別紙案文の検討) 4. 法学研究科のカリキュラム改良【方向性=ビジネス法務の多様化への対応】 5. 法学研究科の人員増強 6. 自由意見交換一次の課題「ビジネス法務学の確立」について

政治経済学研究科	
日時	令和3年9月30日(木) 17:15~18:30
講師	—
テーマ	政治経済学研究科のカリキュラム改革と政治経済研究所との連携
目的	令和4年度から実施予定の政治経済学研究科の新カリキュラムと政治経済研究所との連携について、認識・情報を共有するとともに意見を交換する。

経営学研究科	
日時	令和3年10月6日(水) 17:00~17:30
講師	経営学研究科 渡部 博志 准教授
テーマ	経営学研究科授業運営に関するアンケート結果について
目的	社会人学生を多く抱える経営学研究科において、コロナ禍への対応を超えて、オンライン授業の可能性を検討する。

データサイエンス研究科	
日時	令和3年11月17日(水) 9:30~17:00
講師	—
テーマ	データサイエンス研究科における自然環境・社会課題を対象とした研究推進と教育展開
目的	自然環境・社会課題を対象とした研究推進と教育への展開を推進するために、自然環境・社会課題を対象とした研究に関する取り組みを共有し、議論を行う。

人間社会研究科	
日時	令和4年2月18日(金) 18:00~18:30
講師	人間社会研究科 辻 恵介 研究科長・教授
テーマ	人間科学部における編入学制度の検討
目的	大学認証評価で、人間科学部の編入学不在の指摘を受けていることを受けて、人間科学部における編入学制度の位置づけについての検討を行う。

仏教学研究科	
日時	令和3年11月26日(金) 19:00~21:00
講師	仏教学研究科 Albert Charles Muller 教授
テーマ	デジタルヒューマニティーズ(人文情報学): その意味、歴史、および現在の傾向
目的	東京大学等で研究が進んでいる人文情報学の先端的な知について理解を深めることで、当該分野を利活用した本研究科の研究・教育の向上を図る。

環境学研究科	
日時	令和3年12月13日(月) 18:00~19:00
講師	環境学研究科担当専任教員全員
テーマ	課題の認識と今後の展開の方向性等
目的	学部的大幅改組(令和5年度より、環境システム学科からサステナビリティ学科に改組予定)の動きも踏まえ、現在の環境学研究科の課題を確認するとともに、今後の展開の方向性について議論することを目的とする。

工学研究科	
日時	令和4年1月19日(水) 16:50～20:20
講師	大塚聡アトリエ・一級建築士事務所 大塚 聡 氏 Theatre Workshop 伊東 正示 氏 一級建築士事務所 西川 拓 氏、平田 悠 氏
テーマ	大学院での建築デザイン教育
目的	大学院建築デザイン教育のケーススタディーを検証し、今後の大学院教育メソッドを議論する。
日時	令和4年2月8日(火) 18:30～19:30
講師	—
テーマ	研究室の運営について
目的	大学院への進学者を増加させること、大学院生の研究活動をどのようにサポートしていくかについての意見交換を行う。
教育学研究科	
日時	令和3年12月15日(水) 13:00～15:00
講師	—
テーマ	武蔵野大学教育学研究科の修士論文指導について
目的	研究科委員会メンバーによる修士論文指導の実情を報告し合い、よりよい修士論文指導のあり方を検討する。
薬科学研究科	
日時	令和4年2月14日(月) 13:00～15:25
講師	薬科学研究科修士課程2年生(1名) 博士後期課程1年生(3名) 博士後期課程2年生(4名)
テーマ	【薬学研究所との合同企画】修士課程及び博士後期課程大学院生による修士論文発表会、研究進捗状況の報告
目的	薬科学研究科の博士後期課程に在籍する1年および2年の院生がこれまでの研究成果を発表し、進捗状況を把握して今後の研究指導や研究の方向性について議論することとした。
日時	令和4年2月17日(木) 10:00～18:00
講師	1. 各研究室・二センター教員(研究成果発表) 2. 慶應義塾大学特任教授・本学客員教授 谷川原 祐介 氏(特別講演) 3. 薬科学研究科 堅田 利明 研究科長・教授 薬科学研究科 廣谷 功 教授 4. 薬科学研究科 堅田 利明 研究科長・教授(特別講演・最終講義)
テーマ	1. 薬学系を統合した共同研究課題・統合企画に向けた取り組みの紹介 2. 講演タイトル「個別化投薬を支える薬学サイエンス」 3. ブランドビジョン目標の中間報告と展望・薬学部新ホームページ紹介 4. 講演タイトル「大学人として過ごした半世紀:私の履歴書」
目的	各研究室・二センター(16施設)からの研究成果発表、薬学部長・薬学科長によるブランドビジョン目標の中間報告と展望、さらに2題の特別講演を基調講演として、薬学系を統合したブランドビジョンの取り組みについて議論し、今後の方向性について検討することとした。

看護学研究科	
日時	令和3年11月17日(水) 16:00～17:30
講師	東京都立大学健康福祉学部看護学科 人間健康科学研究科看護科学域 教授 西村 ユミ 氏
テーマ	看護学の発展とケアサイエンスの創設
目的	日本学術会議における看護学の学的位置づけや、現代の保健医療福祉を取り巻く学術的課題についてお話いただき、看護学の発展を目指した研究活動について考える機会とする。さらに、看護学の最先端でなされている議論を理解することにより、本学看護学研究科教員が広い視野を持ち自身の研究計画実施や大学院生の指導にあたる力を身に付けることを目的とした。
日時	令和4年2月28日(月) 16:00～17:30
講師	東京医療保健大学国際交流センター国際交流アドバイザー 早野 ZITO 真佐子 氏
テーマ	学術英語を鍛える:第1回「質の高いアブストラクトを作成しよう」
目的	質の高いアブストラクトはより多くの人を惹きつけ論文本体を読む機会を増やし、研究成果を広めることに貢献する。海外にも研究成果を発信するツールとして英文アブストラクトは重要である。そこで、看護医療系の翻訳に長年携わっている専門家を招き、英文ならではのアブストラクト作成のコツの講義を受け、アブストラクトの作成や指導に当たる際の能力を向上させることを目的とした。
通信教育部 人間社会研究科	
日時	令和3年12月2日(木) 10:40～12:00
講師	通信教育部人間社会研究科 佐藤 裕之 研究科長・教授
テーマ	「特定課題研究演習」の現状と課題
目的	通信教育部大学院人間社会研究科人間学専攻の最大の課題である「特定課題研究演習」の現状を把握し、課題を確認し、その対策を検討する。
通信教育部 仏教学研究科	
通学制(仏教学研究科)と合同開催	
通信教育部 環境学研究科	
通学制(環境学研究科)と合同開催	



世界の幸せをカタチにする。  
Creating Peace & Happiness for the World



Musashino University

武蔵野大学

### 武蔵野大学 2021FD レポート

発行：武蔵野大学 教育企画部 教育企画課

発行日：令和4年6月30日

〒135-8181 東京都江東区有明3-3-3

TEL: 03-5530-7729 FAX: 03-5530-3818

E-mail: [kaikaku@musashino-u.ac.jp](mailto:kaikaku@musashino-u.ac.jp)

URL: <https://www.musashino-u.ac.jp>